
BLACK × HEAVEN

結子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLACK×HEAVEN

【Nコード】

N9119Q

【作者名】

結子

【あらすじ】

ここはどこ？

あんたは誰？

あたしは死んだんじゃないの？

自殺したはずのあたしが辿り着いた場所は、

『天国と地獄の間』

やった。

予想外の始まり

もう、無理や…

バイバイ…

「まもなく、電車が到着致します。白線の内側までお下がりください」

機械的な女の声が聞こえる。

あまりにも機械的すぎて、それが逆に心地よかった。

電車がだんだん近づいてくる。

周りにはスーツ着たおっさんやら、スーパーのビニール袋を腕にぶら下げたおばはんやら、ヘッドホンからシャカシャカ音まき散らし

てる兄ちゃんやら、うるさい子供をほったらかしにしてる親がいっぱいおる。

おっさん、ネクタイ曲がつてるし、汗臭い。

おばはん、エコバッグを持ち歩け。

兄ちゃん、ロリアイドルの曲聴いてんのバレてるで。

子供、じつとせえ。

親、注意せえ。

いつもは気にならん事が今日はやたら気になる。

何でかなあ…

どうせもうすぐ死ぬのに…

電車がどんどん近付いてくる。

もうちょっと…

もうちょっと…

………来た

あたしは、ホームに滑り込んできた電車の顔面に体当たりした。

あー。

今何か変な男したかも。

バキッとか、ゴリッとか。

どっかの骨がイッてもうたんかな。

あんま痛ないけど。

でも、手とかあり得へん方向むいてるわ。

こらやっぱり折れてるな。

あーあ。

まあ、別にいいけど。

キレイに死ねへんってわかっててこのやり方選んだわけやし。

何か…

ちよつと眠たなってきた。

あたし、もう寝るわ。

オヤスミ…。

目が覚めた時、あたしは真っ暗な所にいた。

ん？

目え覚めた？

おかしい。

あたしはホームに飛び込んで、電車にはねられて死んだはず。

ってゆうか、ここどこや？

暗いし、なんも見えへん。

でも、自分の姿はハッキリ見えてる。

周りが全部真っ黒のなんかで出来てるだけなんかな。

「おい」

知らん男の声が、遠いような近いようなようわからん所から聞こえてきた。

あたしが呼ばれてるんかな。

他に誰もおらんみたいやし、やっぱりあたしやんな。

「おいつ。聞こえてんだろ？お前だよ、そこのバカそうな女」

おつとお？

今のは聞き捨てならんな。

確かに頭は良うないけど、人に言われたらムカつくねん。

誰やねん！

ほんでどこにおんねん！

「うるさいっ！聞こえてるわ！ってゆうか、あんた誰なんよ！」

「へ？俺？」

「あんたしかおらんやろ」

「そうだな。俺はここの住人。…えーっと、大家？」

「いや、聞かれても知らんし」

「まあ、どうでもいいじゃん」

「どうしてもよくはないけどな」

あたしは、このアホみたいな男にバカ呼ばわりされたんか。

アカンわ、ホンマにムカつく。

しかも、姿は見せへんし、名前も言わへん。

どついう事やねん。

「あんた、名前は？顔も見せへんって、どつゆつ事よ」

「もうすぐわかるよ。お前はルイだよな？天城ルイ」

「はあ？何で知ってるん？気持ち悪っ」

「おい、気持ち悪いとは何だ。とにかく、いろいろ教えてやるから、そこからひたすら真っ直ぐ前に歩け」

なんやねん、コイツ。

自分は名乗らへんくせにあたしの名前は知ってるし、ここの住人とかゆう意味も全くわからへん。

いや、意味はわかるで？

でもなんていうか、自分が今置かれてる状況が理解出来ひん。

あたし、はねられたショックで頭おかしくなったんかな。

でも、じっとしててもしょうがないし、とりあえずコイツに従ってみよかな。

真っ直ぐ歩けとかゆわれても、方向とかなんもわからんし。

足が地についてる感覚もあんまりないし、イライラしてきた。

「お前、方向音痴か？真っ直ぐ前だって言ってるんだろ。もうちょっと右」

あたしのイライラを逆なでた。

「全部真っ黒なんやから方向なんかわかるわけないやろ！」

「ああ、そうか」

男がそう言った直後に、目の前に真っ直ぐ前方に伸びた幅2メートルくらいの道が現れた。

うつすらと輝いているように見える。

光の道。

「そこ、歩いてきて。別に走ってもいいけど」

「最初っから出してほしかったけどな」

あたしはひたすらその道を歩いた。

絶対走らへんからな。

あえてゆっくりいったんねん。

全面的にコイツに従う気はまだなかった。

10分くらい歩いたら、前方に明かりが見えてきた。

10分て…

遠いわ！！

その明かりを目指して歩いて行ったら、そこにあるもんがだんだん見えてきた。

黒の革張りのでっかいソファに人が座ってる。

その前にはガラステーブル。

ガラステーブルの上にはパソコンと電話がのってる。

あのソファに座ってるヤツが…

さつきからあたしをバカにしてる男か…？

「おお、やっと来たか。おせえよ」

やっぱりそうや。

あの声、間違いない。

男は白のシャツに黒のスーツ、ネクタイはしてない。

髪の毛は真っ赤で、暴風に吹かれてるみたいに逆立ってる。

首にはゴツツイネックレス、耳にはピアス、指には太い指輪。

装飾品と呼ばれる全てのものを身につけている。

年は…

20代前半くらいか？

でこのちょっと上くらいに、ちっちゃい角みたいなのが見えてる。

これもアクセサリーなんかな。

流行るようには見えへんけど。

「俺が誰だかわかるか？」

男は前のめりになって聞いた。

微笑んだ口元からは八重歯がのぞいてる。

八重歯とゆうより、牙に近い。

「だから、ここの住人なんやろ？」

「それはそうだが、もっとなんかあるだろ」

「どう答えてほしいねんな」

あたしがそう言うと、男は豪快に笑った。

何がおもしろいねん。

「まあいいや。どうせ言っても最初は信じねえ」

もう、何なん？

コイツも頭おかしいんちゃうやろか。

「じゃあ、ここがどこかってのはわかるか？」

「わからん。さっきからずっと聞いてるやん。そろそろ教えてくれないんちゃう？」

男はまた微笑んだ。

今度はバカにしたような笑いではない。

「ここは、天国と地獄の間だ。特に名前はついてねえ」

天国？

地獄？

そうゆうもんがあるって聞いた事は何回もあるけど、実際にあるかないかは死んだ人間にしかわからへんもんなあ…

でも…

ホンマにあるってこと？

という事は、じゃあ、あたしはやっぱり死んだって事なんやな。

「で、あんたは誰？」

「俺は、エンマ」

「エンマ？変わった名前」

「名前つつつか、ポジション名的な感じ」

「ふうん」

エンマねえ！。

エンマ…

エンマ？

「あの、ちょっとすいません」

「何だ？」

「あんた、もしかして…あの…閻魔大王？」

男はニッコリ笑った。

やっぱり八重歯がのぞく。

「正解」

あの角みみたいなアクセサリじゃなくて本物の角?!

牙のような八重歯は本物の牙?!

…はっ、アホらし。

こんな話があるか。

天国と地獄の間?

閻魔大王？

ありえへん。

夢や夢。

もしくはコイツの脳みそが緩んでるだけや。

「残念だけど、これは夢じゃねえぞ」

あたしはエンマと名乗った男の顔を見た。

冗談を言っている顔ではない。大真面目。

「お前はさっき電車に衝突した」

さっきよりも声が低くなった。

ちよつと怖い。

閻魔大王の成せる技。

「で、死んだ」

こんなチャラチャラした外見の閻魔大王にお前は死んだとかゆわれ
ても、イマイチ信じられんわ。

でも…

あたしが死んだ事は間違いないんじゃないんかもしれへん。

「でも、正直お前微妙なんだわ」

「何が？」

「天国行きか、地獄行きか」

「あたし、地獄に墜とされるほど悪い事してへんと思っんやけど」

「すんなり天国に行けるほど善人でもなかった。」

「ウリもやったし、万引きも、薬遊びもやったもんな。」

「そもそも自殺したヤツを簡単に天国に行かせるほど俺は甘くねえよ」

「確かに、あたしは誰がみても善人ではなかった。」

「飛び抜けた非行少女。」

まあさすがに、人は殺してないけども。

「それやったら…」

あんだ、あたしが自殺した理由知ってんの？

自殺でもしな…

しよוגがなかった…

死にたいくらい辛かった…

何がアカンのよー!!」

エンマは、急に泣き出しそうになったあたしの顔を冷めた目でみつめる。

「お前わかってねえみてえだけど、自殺はな、殺人と変わんねえんだよ。」

人を殺した事になるんだよ。

それにな、お前が自殺した理由くらいだいたいわかる。

俺を誰だと思ってるんだ」

1年前、あたしは両親に殺されかけた。

首をしめられて、あたしが意識を失ってる間に家に火をつけられた。

無理心中しようとしたみたい。

でもあたしは、途中で誰が通報したんか、駆けつけた消防隊員に助けられた。

だから、両親だけが死んだ。

両親が、いろんなものに苦しんでる事は知ってた。

親父の博打好きで膨れ上がった借金、殺人的な取り立て、それによつて出来た人間関係の分厚い壁、おまけにあたしの悪行三昧。

でもたぶん、両親が一番苦しんでたんはあたしが親父の借金をちよつとでも減らすためにウリをやつてた事やと思う。

あたしが取り立て屋と寝た事を知ってたんやと思う。

でもこれは強制じゃない。

自主的にやつてた事。

だから、親父は責任を感じる事はなかったのに。

それでも、やっぱりそういうわけにもいかず、結局選んだ道はみんな死ぬ事。

最良の選択でもあるし、最悪の選択でもある。

その時にしつかり死んどけばよかったのに、悪運が強かったんか生き残ってしまった。

兄弟もおらんかったあたしは、これで完全に一人きり。

それまでは1人でも大丈夫、1人が好き、って思ってたけど、それは1人じゃない時の話。

みんなおらんくなったら、寂しかった。

泣きたくなった。

でも、まだ自殺する勇気なんてなかった。

いくら死にたくても…

いくら消えたいって思っても……

死ねへんのやったら、何とかして生きるしかない。

そうすると、やっぱり使えるものは1つだけ。

自分の体。

今までも使ってきたし、それをするのに苦痛を感じる事はなかった。

むしろ、誰かが近くに来てくれる事を嬉しく思った事もある。

あの時は、ただ人の温もりを求める事だけを考えて生きてきた。

他には何にも考えられへんかった。

仲間もいっぱいいたけど、それでは満たされへん。

仲間とは違う、家族の温もりがほしかった。

誰か…

あたしを温めてください…

そんな時出会ったんが、リュウやった。

リュウと目が合った瞬間にわかった。

この人は、あたしが求めてたものをくれる人やって。

きつとあたしを助けてくれるって。

フラフラっと近付いていったあたしを、リュウは何の迷いもなく受け入れた。

そうなるのが当たり前なんやって顔をして。

名字も年も住んでる場所も、あたしはリュウのほとんどを知らなかった。

それでも、必死で好きになった。

必死で愛した。

リュウもそれに応えてくれてた。

リュウは、どれだけ一緒にいてもあたしに触れようとしーひんかった。

だからこそ、リュウには家族の温もりがあっ たんやと思う。

あたしにとっては生きがいやった。

リュウがいてくれたからあたしは生きていられた。

それくらい、好きやった。

でも、裏切られた。

他に女がいたとかそういう事じゃなくて、そんな浅い裏切りじゃない
くて…

リュウは…

あたしを置いて消えた。

あたしになんにも言わんと消えた。

もしかしたら、何か事情があつたんかもしれへん。

もしかしたら、死んだんかもしれへん。

でも、もし死んだんやとしたらなおさら…

あたしも連れて行ってほしかった…

「あんた…ホンマに閻魔大王なんやったら…リュウの居場所教えてよ…何でも知ってるんやろ…？」

「もちろん知ってる」

「じゃあ、教えて…お願い…」

エンマは眉間にしわを寄せて、あたしをじっと見つめた。

睨んでるわけじゃなくて、哀れんでるような目…

そんな目で見んといて…

余計惨めになるから…

「それは出来ない」

「なんで…？」

「個人の情報は、何があっても漏らしちゃいけないんだ」

エンマがものすごい真面目な顔でふざけた事を言っただもんやから、あたしは思わず笑ってしまった。

不覚。

「個人情報保護法？現実の世界と変わらんやん。夢のない夢」

「だから、ここも現実なんだって」

エンマの表情はさっきよりもだいぶ柔らかくなってる。

あたしも、もうそろそろ気付いてるよ。

これが夢じゃないって。

現実なんやって。

「わかってる」

エンマは意外そうな顔をした。

「意外に早かったな」

表情に出たまんまの事を言った。

他の人間は、ここが現実の世界やってわかるまでもっと時間がかかるんやろう。

「あんたの顔見てたら、ホンマなんやろなあって思えてきてさ」

エンマは笑った。

口元からはあの牙が思いつ切り顔を出してる。

「それでだ」

エンマはまた真面目な表情に戻して話し出した。

「俺はここの住人であると同時に、ここにやってきたヤツをどうするか決める番人なんだ。まあ、裁判官みたいなもんだな」

エンマが自分の説明を終えると、ガラステーブルの上のパソコンがポロンと音をたてた。

メールがきたみたい。

エンマはマウスを軽く操作している。

閻魔大王様がパソコン？

地味やし。

「お前、どっちに行きたい？」

「は？」

「だから、上に行きたいか下に行きたいかどっち？」

天国に行きたいか地獄に行きたいかってことを聞いてるんやろな。

「そら、上に決まってる」

「だよな」

わかってんのやったらいちいち聞くなや。

「でもなあ…。他のエンマに聞いても、そんなもん自分で決めろって言うんだよ」

他のエンマ？

コイツみたいなのがまだおるって事なんか？

「エンマってあんただけじゃないの？」

「当たり前だろ。お前と同時に死んだ人間が他に何人いると思ってんだ。俺1人じゃ無理だっつーの」

死後の世界ってこんなに事務的なもんなん？

夢壊れるわー。

「で、あたしはどつなんの？」

エンマは腕と足を組んだ。

そして、うんうんと唸りだした。

しばらくあたしをほったらかしにして考え込んでたエンマが、いきなりガラステーブルを両手で思いつ切り叩いた。

いや、割れるて。

「決いめたあゝ」

さんざん考えた割には、えらい軽い発言。

あたしは一気に不安になった。

「しばらくは天国にも地獄にも行かせない」

またわけわからん事言い出しよったわ。

「ほんなら、どうしたらいいんよ」

「俺の下で働いてもらう」

「どづいつ事？」

「そのまんまの意味だよ。しばらく働くの」

「はあ」

もうなんか、疲れるわ。

コイツ、詳しい事全然説明しよらんし。

よう裁判官なんて言えたもんやわ。

「下界におりて働いてもらう」

「下界？じゃあ、あたしは生き返るって事？」

「そんなわけねえだろ。幽霊として下界におりるんだよ」

頭痛くなってきた。

死んでも頭痛は起こるらしい。

厄介な話。

「一応聞くけども、幽霊って…学校のトイレにいたり、病院にいたりするあの幽霊やんな？」

「そうだな。あの幽霊だな」

まさか自分が幽霊になるなんて考えた事もなかった。

でもまあ、さつき死んだわけやし、そうなるんか。

「働くつて、何をするん？」

「世の中の為になることをしてもらおう。って言っても、下におりてから説明した方がわかりやすいだろうから」

エンマはあたしの顔の真ん前に手をかざした。

その手を一振りすると、あたしの体はオレンジ色の光に包まれた。

熱い…

仕事人発動

次の瞬間、あたしの目の前には見慣れた景色が広がっていた。

あたしがずっと暮らしてた街…

リュウと出逢って、そして裏切られた街…

あたしが死んだ街…

きやあきやあ大騒ぎしながら歩いてる女子高生も、でっかい声を張り上げて話してるおばはんたちも、フラフラ徘徊してるホームレスも、全部があたしを幸せな気持ちにさせた。

生きてる時はウザかっただけのものが全部、泣きたくなくなるくらい懐かしく感じた。

あー、あたしは死んだんや。

この人らとはもう全然違う世界にいるんや。

電車に飛び込む前…

ホンマに死にたいと思ってた。

リュウのおらん世界から消えたいと思ってた。

後悔なんか絶対しーひんと思ってた。

でも…

「後悔したか？」

最初の時と同じで、姿は見えへんかったけど、声だけが頭に響いてきた。

耳で聞いているのとは全く違う感覚。

エンマは…

あたしの名前だけじゃなくて、心ん中までわかるんかなあ…

「うん…」

「でももうお前は生き返れねえ。だったらせめて、天国に行きてえよな？」

「あたしは…天国に行ける？」

「お前の頑張り次第だ」

エンマの声は優しかった。

優しい閻魔様か…

世の中の絵本を全部書き直した方がいいんかもしれへんな。

「がんばる」

頭にふわつとした感触があった。

それがエンマの手やって事がなんとなくわかった。

アイツ…

いいヤツやん。

それにしても。

今、あたしは幽霊なわけやけど…

そやのに、完全に足があるわけよ。

えっ、なんで？

普通に地面に立ってるわけよ。

だから、なんで？

幽霊ってさ、普通こっつ、なんか…

ふわっとしてて、足とか無くて、宙に浮いてるもんなんじゃないの？

いや、でも実際見た事ないし、こんなもんなかなあ。

「お前、運が悪かったな」

エンマがまた話しかけてきた。

「は？」

「幽霊って浮かんでるイメージだろ？」

「うん、まあ。でもあたしは普通に立ってる」

「飛べるやつと飛べないやつがいるんだよ」

あたしは飛べへんやつって事が。

だから運が悪い。

なるほど。

飛べる方がいいに決まってるもんな。

「じゃあ、思いっ切りジャンプしてみ」

エンマに言われた通り、渾身の力を振り絞ってジャンプしてみた。

その飛躍力は生きてる時と大差なし。

「あー、だめだ。お前ホントついてねえな」

エンマは小バカにしたような口振りでそう言った。

次はどういう事や。

「宙に浮かぶことは出来なくても、ものすごいジャンプ力があるやつもいるんだ」

あたしにはそれも備わらへんかったってわけか。

確かについてない。

「なんとかならへんの？」

せっかく幽霊になったんやから、ちょっとくらい飛んでみたい。

人間の夢やん？

「無理だな」

「なんで？あんだ、閻魔なんやからなんとかしてや」

「閻魔は万能じゃねえんだよ。それに、神様が決めた事だから仕方ねえ。あきらめろ」

神様ねえ…

もう何でもありやな。

「そもそも神様は何を基準に飛べるとか飛べへんとかを決めてるん？」

「さあ。あの人めんどくさがりだから、たぶんテキトーだと思うけど」

「理不尽やわ」

神様がめんどくさがりて。

どつりで願い事が叶わなかったわけや。

ちゃんとしてくれな困るわ。

神様、しっかり。

「じゃあ今から注意事項言っから、ちゃんと聞けよ」

「めんどくさい」

「うるせえ。俺だつてめんどくせえよ」

そう言われると、逆にちゃんと聞いこうという気になるんはなんでやろつ。

「まず、お前は飛べないからこれから行動するときは全て徒歩。

その際、生きてる人間には触れない事。

生きてる人間を通り抜けない事。

徒歩で行けねえような場所には俺が連れてってやる」

「何で触ったらアカンの？っていうか、触れるん？」

「触れるっていうか、人間の体の中にお前の手を通り抜けさせるって事だな。

あいつら意外に敏感だから、触られるとその場所に寒気を感じるし、通り抜けられるものすごく不愉快な気持ちになる」

「ふうん」

やってみたくなくなった。

好奇心旺盛ですから、私。

さっそく、一番近くにいた大学生くらいの兄ちゃんの肩に、そっと手を通してみた。

みるみる内に首もとまで鳥肌がたった。

兄ちゃんは、周りをキョロキョロと見回しながら、両腕をさすりはじめた。

あたしの姿は見えてへんみたい。

おもしろー。

「あ、コラ」

エンマが言った。

あたしは上を向いてニツと笑った。

エンマがそこにいるような気がしたから。

「じゃあ、次な。腹は減らねえが、疲れる事はある。だから、無理はしないように」

「了解」

「たまに他の幽霊に出会う事もあるだろうが、当然の事だからいちびじる必要はない。気が合うようなら友達になってもいい」

「了解」

「はい、次。生き霊に会ったらとにかく逃げろ。何が何でも目を合わすな。絶対からまれんな」

「生き霊って？」

「まだ生きてる人間の霊だ。」

強い恨みや憎しみによって生まれる。

人間のそういう気持ちがハッキリ形になったものだな。

でもやっぱり霊なわけだから、普通の人間には見えない。

あいつらの力はハンパねえから本物の霊でもかなわねえ」

「絶対逃げます。がんばります」

背中が少し寒くなった。

人間の感情って…

怖っ！！

「次、たまにお前の姿が見えるやつがいるはずだ。靈感があるやつだな。そいつらとは会話ができる」

生きてる時はそういうの信じてへんかったけど、自分が霊になったら、そういうのありがたいと思える。

自分の姿が誰にも見えへんのはすごい悲しいし、声が誰にも聞こえへんのはすごい辛い…

そんな時に、あたしの姿が見えて、あたしの声が聞こえる人が現れたら嬉しいに決まってる。

あたしの口元は、知らず知らずのうちに緩まっていた。

「きつとお前を支えてくれる」

エンマの笑顔が頭に浮かんだ。

もちろん、あの牙は健在。

あたしは、靈感のある人を探すことに決めた。

「あともう一つ。

これで最後だ。

緊急事態の時、靈感のないやつにも話しかける事が出来る。

伝えたい事を頭の中で念じれば、相手の頭の中に直接言葉を送れる。

だが、これはものすごい体力が必要だ。

相手にもお前にも大きな負担がかかる。

だから、あまり使わないように」

「わかった」

エンマからの注意事項を聞き終えた感想。

なかなかめんどくさい。

まず飛べへん意味がわからんし。

だってそれは絶対条件っていうか、幽霊の醍醐味やん？

ほんで、幽霊やのに疲れるし頭も痛くなるて。

どうやら幽霊も閻魔と一緒に万能ではないらしい。

期待はずれもここまできたらあきらめるしかないな。

下界で働く事をどれだけの期間続けなアカンのかわからんけど、なんか氣イ抜けてきた。

でも、どれくらい続けなアカンの？ってエンマに質問する気はなかった。

だって、とんでもない数を言われたら余計に氣イ抜けるやろうから。

「今日はとりあえずパトロールな」

あたしは『パトロール』という言葉に対して、顔がアンパンで出来てるあの国民的ヒーローを思い浮かべた。

そういえば、どういう原理かアイツは空を飛べるんやったな。

アンパンに負けた気がした。

くそー。

顔面濡らしたるか。

「その辺テキトーに歩いてみる」

エンマに言われた通り、テキトーに歩いてみた。

おかしい感じがする。

あたしは今普通に歩いてて、でも他の人にはあたしは見えてへん。

自分が死んだという事に慣れるまでには、もうちょっと時間がかかりそうだった。

「パトロールとか言われてもなあ……」

独り言のつもりでもなかったけど、エンマからの返事はなかった。

向こうの都合で交信するつもりなんやろか。

勝手な話や。

あたしは、エンマが絡んでこーへんのをいい事に、ちよつとした悪さを試みてみる事にした。

こんな体になることなんて滅多にないんやから、ちよつとは楽しみな損やろ。

とりあえず、横を通る人の体に片っ端から触れてみた。

あたしに触れられた人はみんな、さっきの大学生と全くおんなじ反応をする。

周りをキョロキョロ見渡しながら両腕をさする。

靈感のない人間でも、近くに『何か』がいることだけはわかるらしい。

だからキョロキョロしてその『何か』を探そうとする。

でも、結局見つからへんからあきらめる。

みんなおんなじ反応やから、この実験にはすぐに飽きてしまった。さて、レベルアップ。

次は人を通り抜けてみる事にした。

メタボリックなおっさんはイヤやったから、さっきとは違って人を選ぶ事にした。

あたしの目についたんは、白いフリフリのワンピースを着て、隣にいるBボーイの腕にしがみついている脱力感丸出しの女。

その女をみた瞬間、あたしは思った。

嫌い。

よし、アイツにしよう。

あたしはその女の真ん前に立ちただかった。

自分から通り抜けるのではなく、こいつに通り抜けさせようという

魂胆。

理由は特になし。

さあ、来い。

女の顔とあたしの顔が、女の胸とあたしの胸が、女の足とあたしの足が一瞬重なった直後、女はあたしの後ろにいた。

「え？何これ…」

女が、茶色に染めた眉毛を寄せた。

「どうした？」

Bボーイが心配そうに女の顔をのぞきこんだ。

「なんかあゝ、今すっごい変な感じがしたあゝ。気持ち悪いゝううゝ」

女はネチネチと泣きそうな声で言った。

あゝ、殴りたい。

Bボーイの表情はさらに心配そうになった。

「大丈夫？病院、行く？」

コイツも殴りたい。

コイツらの会話に腹を立てるやつはきつとあたしの他にも大勢いるはず。

「優しい」

幽霊に通り抜けられた人間が不愉快な気持ちになるのは、あまり長い時間ではないらしい。

周囲を不愉快な気持ちにさせているやつらは、もっと不愉快な気持ちになるべきや。

ねえみなさん、違いますか？

「おい」

げっ。

閻魔様の登場。

「お前、何やってんだよ」

エンマの口調には怒りは含まれてないように思えた。

「何って、実験」

「ただのいたずらだろうが」

エンマは、あたしがこんな悪さをするという事を見越していたに違いない。

いやあ、さすがや。

「パトロール、終わったのか？」

「っていうか、まだ始めてもないけども」

エンマのため息が聞こえた。

そんなもんまで聞こえるとは、素晴らしい性能。

「お前な、天国に行けなくてもいいのか？もつとがんばれよ」

「だって、急にパトロールとか言われても、何をどうしたらいいんかわからんねんもん」

「悪いことしそうなヤツが悪いことしねえようにすんだよ」

そんなアバウトに言われても困るけど。

「じゃあ例えば、さっきからあそこでヤンキーに絡まれてるメガネを助けるとか？」

あたしはカツアゲをくらってるメガネの少年を指差した。

「そっだよ！見えてんだったらさっさと行け」

めんどくさい、そう思いながらもエンマのいう事に従った。

ちんたら歩いて、模範的なカツアゲを実施しているヤンキーの近くに立つと、あたしはすぐに首をかしげ、眉間にしわをよせた。

えーつと…

どうしようかな。

「もしもし」

とりあえず声をかけてみた。

無反応。

「おい、聞いてんのかコラ！」

怒鳴ってみた。

無反応。

さて、どうしたもんか。

どん詰まり。

「なあ、これどうしたらいいの？」

エンマに話しかけてみた。

まさかの無反応。

お前もかい。

「さっさと出せって」

ヤンキーがメガネの胸ぐらをつかんだ。

メガネはビビって額から大量の汗を出している。

あゝあ。

かわいそうに。

2人の顔と顔の距離は異常に近い。

ヤンキーっていうのは、なんでこつ顔を近づけたがるんやろつか。

習性？

鉄則？

不思議で仕方がない。

メガネはカバンの中に震える手を突っ込んだ。

金出す気や。

マズいな。

あたしは、何かないかとあてもなく周りを見渡した。

そこで目をつけたのが、ヤンキーの足元に転がってる石ころ。

でも、拾おうとして気がついた。

アカン。

触れへん。

どうしよ...

もっつ!!

石ころ!!

飛べ！！

アイツに当たれ！！

切羽詰まつの念力。

素手でやれへんなんで、あたしも落ちぶれたもんな。

「いつてえええ！」

ヤンキーが、カエルを踏み潰した時のような声で騒いだ。

こめかみの辺りにはうつすらと血が滲んでいる。

あ？

もしかして…

今度は錆びた釘が目についた。

危ないもんがごっそり落ちとんな。

釘！

アイツのケツに刺され！！

「
うう〜
」

見事に命中した。

やっぱり、あたしは物を思い通りに動かせる。

ヤンキーはブツブツ言いながらも金は諦め、その場を小走りで去っていった。

メガネは何があつたんかよくわかってないみたいで、呆然と立ち尽くしとる。

コイツ、思ったよりも若そう。

もしかしたら小学生かもしれんな。

メガネは急に動き出した。

ものすごい勢いで何かを探している。

落とし物でもしたんやろか。

しばらく動き回ったメガネは、カバンを大事そうに両手でかかえて上を向いた。

「ありがとう」

ドキッとした。

まるで見当違いの方向を向いてたけど、あたしに言ってくれた言葉なんやってわかったから。

「どういたしまして」

あたしが言うと、聞こえてへんはずなのにメガネはビックリした顔をした。

でも、それを大して気にすることもなく、メガネは走り去った。

「どんな気分だ？」

さっきは無視したくせに、今更出てきよった。

「何が？」

わざととぼけたった。

エンマに二度手間をプレゼント。

「人助け」

「まあでも、嫌いじゃないかな」

人に礼を言われるのは気分がいいもんやって初めて知った。

「そうか。それにしても、お前にアレがあるとはなあ。いやあ、たまげた」

「何の話？」

今度はホンマに何の話かわからへん。

「お前の力だよ。物を自分の思い通りに動かせる力。ポルターガイスト能力」

アレにはあたしが一番ビックリしたわ。

「飛べへんくても、あんな事が出来ればいいや。何にも出来ひん幽霊じゃなくてよかった」

「簡単に言ってるけど、マジですげえんだぞ」

「珍しいの？」

「かなりな」

得した気分。

特殊能力…

ああ、いい響き。

「まあ、こんな感じで世の中の為になる事をしてくれ」

あたしには、上から下界におりてきて、疑問に思った事があった。

いつエンマに聞こえるかと思ってたけど、今ふと思い出したから今聞く事にする。

思い立ったらすぐ行動。

あたしの座右の銘。

まあ、今決めた事やけど。

「なあ、エンマ」

「うん？」

呼び捨てにした事を気にしている様子は全くない。

寛大な閻魔様。

「聞きたい事がある」

「どっぞ」

「あたしは、何で立ってるん？」

この疑問に気付いた時、あたしは自分が天才なんちゃうかと思った。

「だから、飛べねえからだろ」

「そうじゃなくて。」

あたしは物に触れへんはずなのに、何で地面には立ててるんかった事。

だって立ってるって事は、足が地面に触れてるって事やる？」

「ああ、そういう事か。」

その説明すんの忘れてた。

つつつか、俺もどう言ったらいいのかイマイチわかんねえんだわ」

「わからんくてもがんばって」

「例えば、さっきみたいに石ころを持ち上げる事は出来ねえが、地面に立つ事はできる。」

椅子を持ち上げる事はできねえが、椅子に座る事は出来る。

壁を押すことは出来ねえが、壁に寄りかかる事は出来る。

サッカーボールを蹴る事は出来ねえが、サッカーボールの上に立つ事は出来る」

「サッカーボールの上に立つ事は、まあ無いと思うけど」

「例えばの話だよ。でもほら、なんとなくわかるだろ？」

「わからん事もないかな」

「思ったより伝わったみたいでよかったよ」

「あともう一個」

「はい」

「あたし、どこで寝るん？」

「気にすんな。幽霊は眠くなんねえから。ちなみに、風呂も便所も必要ねえ」

秒殺。

さっきのややこしい説明とは大違いや。

まあ、幽霊なんて存在自体がややこしいんかもしれへんけど。

友情を超えた友情

あたしが死んでから丸1日が経った。

あたしの死を知って、あたしの為に泣いてくれた人はいるのかなあ…

そう思ったらいてもたってもいられへんくなって、生きてる時によく仲間とたまってた場所に行ってみた。

座右の銘、行使。

そこは、コンビニの前でもなく、寂れた倉庫でもない。

ただの児童公園。

昼間はちっちゃい子供が楽しそうに遊んでるけど、夜になるとしんと静まり返り、絶好のたまり場になった。

たまにポリが来る。

それがウザくてたまらんかった。

あたしは、ほぼ毎日その公園にいた。

仲間たちもほぼ毎日そこにいた。

特別に何かをするという事もなく、会話がやたら盛り上がるというわけでもなかったけど、みんながそこにいたがった。

年も違うし、住んでる場所もバラバラやったけど、なんでか自然に集まった。

たぶん、みんな寂しかったからなんやと思う。

みんなが誰かと一緒にいたかったんやと思う。

誰一人、そういう事を口には出さへんかったけど、みんながその事に気付いてたんやと思う。

だから、あんなに居心地がよかったんやと思う。

公園に着くと、今日もやっぱりみんながいた。

でも、なんとなくいつもと違うような感じがする。

輪になって座っているみんなの真ん中には、ポウッと明かりが灯っている。

なんやろっ…

あたしはみんなにゆっくり近付いた。

黒のスウェットのヤスとジンベエのシゲの間から、その明かりの正体を確かめようと中をのぞき込んだ。

みんな…

なんで…

こんな事……

一気に熱いものがこみ上げてきた。

仲間たちの輪の中に灯っていたのは……

あたしやった。

ステンレスの縁取りの写真立ての中に入ったあたしの顔写真。

あたし、すごい笑ってる。

ちゃんと笑えてる。

いつの写真なんやろう…

その写真立ての前には、ロウソクが2本と線香が数本、雑草とあんまり変わらへんちっちゃい花束、よう吸ってたタバコ、大好きやったチュッパチャプス、それにCDラジカセが置いてあった。

「ルイ…なんで…」

ゴスロリのマリアが、隣にいるナナコの手を握り締めながら涙声で言った。

ナナコは、夏は浴衣で春夏秋冬は着物を必ず着ている。

今日は、鶯色のシンプルな着物。

そのくせ、髪はシャンパンゴールド。

ナナコはマリアの手をしっかりと握り返した。

「アイツも相当キツかったんだろ。可愛いそうに…」

最年長のタケが言った。

喉の奥がつまったようなしゃべり方はいつもの通り。

「かわいそうなんかじゃねえよ。俺らだってアイツと変わんねえのに…なんで…アイツだけ…」

パンクバンドのボーカルみたいなシュウイチが、膝から崩れ落ちた。

顔を両手で覆って泣いている。

タケがシュウイチの頭をくしゃくしゃと撫でた。

「ちゃんと…送ってやろうな」

タケはそう言って、CDラジカセの再生ボタンを押した。

動くかどうかもわからんような古いラジカセのボロボロのスピーカーからは、あたしが毎日のように聴いていた音楽が流れてきた。

前に観た映画で流れてた曲。

n o t a t a l l o f F R O M S I L E N C E.

「これ…ルイがいつも聴いてた曲？」

ナナコは抑えられなくなったみたいで、ポロポロと涙を流した。

それを隠そうといいひんナナコは、いつも以上に凜としている。

「誰も経なんか読めねえしよ、この曲が経の代わりだ」

タケも少し目を赤くしながら言った。

これは…

あたしの為のお葬式…？

きっと誰もお葬式をやってくれへんかったんやろつ。

だから、こうしてコイツらがやってくれた。

ヤス…

シゲ…

マリア…

ナナコ…

タケ…

シュウイチ…

ゴメン…

ゴメン……

「葬式か…？」

エンマが言った。

「そつみたい…」

「お前、いい仲間がいるじゃねえか。それなのに自殺なんて…やっぱり地獄に墜としとくべきだったな」

どんどん溢れ出てくる涙を止められへんかった。

拭っても拭っても溢れてくる。

涙腺が破裂したみたい。

あたしなんかの為にこんな事してくれて、ありがとう…

あたしなんかの為に涙を流してくれて、ありがとう…

「ル…イ…？」

マリアが言った。

驚いてマリアの方を見ると、マリアは間違いなくあたしを見ていた。

え…？

あたしが…

見えるん…？

そのマリアの言葉に、他の5人も慌ててマリアが見ている方向に目をやった。

そこにはもちろん、あたしがいる。

5人とも目をバツチリ見開いて、口も半開きになった。

「もしかして…、みんなあたしが見えてる…？」

全員がうなずいた。

姿が見えているだけではなく、声まで聞こえるみたい。

すぐにピンときた。

これは、エンマの仕業や。

エンマがあたしの姿をみんなに見えるようにしてくれてる。

あたしの声をみんなに聞こえるようにしてくれてる。

「ルイーー!!」

マリアを筆頭に、みんながあたしに走りよってきた。

マリアがあたしに抱きつこうとし、あたしもそれを受け入れようと両手を目一杯広げた。

でも…

マリアが前に突き出していた手は、何の抵抗もなくあたしの体を通り抜けた。

そつや…

あたしはもう死んでるんや…

もうこの子を抱き締めてやることも出来ひん…

マリアは16やけど、極度の甘えん坊で、いつも誰かが手をつないだり肩を抱いたらな、突然泣き出す事もあった。

両親から十分な愛情を受けてなかったんやと思う。

そんなマリアの隣にいたんは常にあたしやった。

あたしはマリアがかわいくてかわいくて仕方なかった。

マリアもそんなあたしの気持ちに応えるようにいつもあたしの隣に
いてくれた。

でも…

今マリアの手を握っているのは、あたしではなくナナコ…

もしかして…

あたしは…

自分がリュウにされた事を、マリアにしまっ たんかもしれん…

あたしの体を通り抜けている自分の手を見たマリアの目からは、滝
のように涙が溢れている。

「なんで…自殺なんて…」

ナナコが、倒れそうなマリアの体を支えながら言った。

しっかりとマリアを支えられているナナコが、羨ましくて仕方なかった。

「すごい大事な人に…」

裏切られて…。

もうあたしなんて生きててもしょうがないって…

思ったから…。

あたしが存在する事にもう意味がないって…

思ったから…」

自分が言った言葉が間違ってるってもうわかってる。

だって…

あたしが存在する意味は、ここにあったんやもん…

あたしがやったのは、裏切り。

だから、みんなに申し訳なくて、みんなの目を見ることが出来ひんかった。

「俺らは…お前の何だったんだよ…。俺らじゃダメだったのかよ…。
なあ、ルイ…」

いつもはアホな事ばかり言ってるシゲが、目にいっぱい涙を溜めて言った。

「ゴメン…ホンマにゴメン…」

謝ることしか出来ひん自分に腹が立った。

あまりに弱かった自分が情けなかった。

コイツらに甘えることが出来ひんかった事が悔しかった。

「あんまり責めるんじゃねえよ。

ルイだって辛かったんだ。

それに、後悔して反省もしてる。

俺らがルイのいろんな事に気づいてやれなかったのも悪かったんじゃない
やねえかな」

タケがシゲの肩に手を置いた。

「ルイ…ルイ…」

マリアが激しい嗚咽を漏らしながら一生懸命あたしの名前を呼んだ。

抱き締めてやりたい。

頭を撫でてやりたい。

でもそれは絶対に出来ひん。

それが死ぬという事やから…

「ルイ…申し訳ないんだが、10分以上は無理なんだ」

そういう決まりがあるのか、エンマの力に限界があるのか、エンマは言いにくそうにそう言った。

「みんな、ゴメン…。あたし、もう行かなアカンみたい…」

あたしは必死で笑顔を作った。

笑う事は、泣く事よりもずっと難しい。

「俺ら、お前の事絶対忘れねえから…」

シュウイチも笑った。

「ありがとう…。」

あたしも絶対忘れへんよ…。

ずっとみんなを見てるから…。

じゃあ、バイバイ…」

あたしが別れを告げると、次の瞬間、みんながキョロキョロし始めた。

どうやら、あたしの姿はもうみんなの目には届いてないみたい。

まだここにいんのに…

目の前にいんのに…

やっぱり、エンマの力がなかったらあたしは人の目には映らへん存在になってしまうんや。

でも、これが自分で選んだ道やから…

この世から消える事を望んだんは、あたし自身やから…

「変わったヤツらだな」

エンマの声は優しくかった。

「うん…でも、見た目とは違ってみんな誰よりもいいヤツやで」

「わかってるよ。そうじゃなくて」

「どついう意味？」

「お前は今幽霊なんだぞ。」

死んだはずのお前が突然目の前に現れたのに、誰一人怖がってなかったじゃねえか。

怖がるどころか、嬉しくてたまんねって感じだった」

はっとした。

確かに、驚いてはいたけど誰もあたしを怖がってはなかった。

「普通はさ、どれだけ親しくしてたとしても、死んだはずの人間が現れたらちょっとくらい怖いと思うはずなんだよ。」

それが全くなかったから、変わったヤツらだなって言っただんだ」

ホンマに…

そんなんやから、みんな世間から浮くんや…

でも、あたしは大好きやった。

もちろんこれからも。

みんな、ありがとう。

あたし、絶対天国に行くから。

上からずっとみんなを見てるから。

仕事人VSオシャレ強盗

あたしが『仕事人』になってから数週間が経った。

それまでに解決した仕事はどれも大したことのないちっちゃいもの
やったけど、こういう事が意外に性に合ってる事に気がついた。

三つ編みの中学生の万引きを阻止した時も、

腹の出たおっさんを狩ろうとしていたやんちゃ坊主たちをこらしめ
た時も、

ヤクザ同士のケンカをポリが来る前に辞めさせた時も、なかなか気
分がよかった。

必殺仕事人、ルイ。

響きも悪くない。

ここ数日でわかった事はもう一つ。

あたしのポルターガイスト能力がすば抜けてるって事。

エンマが言うには、他の能力者はせいぜい石ころや釘やスプーンやフォークなんかの小さいものや大きくても椅子やテレビくらいの大ささのものしか動かせへんらしい。

でもあたしは違った。

水や火や風まで自由に動かせる。

やった事はないけど、たぶん人間も動かせると思う。

人を飛ばす事は出来ても自分は飛べへんて…

やっぱり理不尽やわ。

神様め。

いつまでもうだうだ言つたるからな。

覚えとけよ。

「ルイ」

「あ？」

神様への怒りを引きずつたまま、エンマに返事をした。

完全に八つ当たりやけど、そんなん知らん。

全て神様に言ってください。

「なんだよ、機嫌悪いな」

「別に。で、なんなん？」

エンマはすでにあたしの気分屋には慣れたらしく、八つ当たりをしても全く気にしいひんようになった。

慣れって恐ろしい。

いや、素晴らしい。

「えーっと、なんだっけなあ……。ああそうだ、思い出した。今日は素晴らしい知らせがある」

「絶対素晴らしくないやろ」

あたしもエンマの楽観的な性格には慣れた。

いちいちイライラもしてられんし。

「本日午後3時きっかり、お前が今立つてる場所から100メートルほど先にある銀行に強盗が入る」

そののどのへんが素晴らしい知らせなんか、ぜひ説明していただきたいもんやわ。

エンマはたまに、こんな風に未来に起こるよからぬ出来事をあたしに報告してくる。

それをなんとかするのもあたしの仕事。

「うん」

「のちに、殺人事件へと切り替わる」

「うん」

「撃退せよ」

「了解。でもさあ、前から思ってたけど、エンマは未来の事が分かっててそれをあたしに変えろって言ってるわけやろ？未来って変えてもいいの？」

「未来を変えたらダメだなんて、誰が言ったんだ？」

「あらゆる書物」

「だっていつても、マンガやけど。」

「悪い未来を良い未来に変えて何が悪い。まあでも、出来るだけ変

えないようにな。今回は、金を奪われないようにする事と人を殺させない事だけをやってくれ」

「わかりました」

まだちょっと時間には早かったけど、とりあえず銀行に行ってみる事にした。

現在の時刻は午後2時45分。

銀行の自動ドアを通り抜けると、やたらと明るい空間が広がっていた。

自動ドアですらあたしの存在を感知出来ひんらしく、開いてくれへんかった。

まあ、開いたら開いたでビックリするけどな。

あたしと、中にいる人達が。

自動ドアの両サイドには、おっきな観葉植物がめんどくさそうに立っていた。

銀行にある観葉植物は、銀行強盗が入った時に、犯人の身長を目安にするために置いてあるいうんはホンマなんかなあ。

風もないのに、ふと葉っぱが揺れた気がした。

もしかしたらコイツはあたしの存在に気付いたんかも。

あんだ、もしかして幽霊か？―

そうやで、珍しい？―

そうでもないけど―

こんな会話が出来ればいいのに。

銀行内は空いていた。

大学生くらいの女の人とどっかの会社の制服の女の人、初老の男の人とその奥さんらしき女の人、サラリーマン、白髪で品のよさそうなばあちゃんの6人しか客はおらん。

客サイドのゆったりとした時間の流れに比べ、カウンターの銀行人員たちはビデオの早回しのようにせわしなく動いている。

ずっと見てたら酔ってきそうや。

エンマの報告に誤差はないはずやから、3時まではする事がない。

とりあえず、深緑で合皮張りのソファに腰掛けた。

あたしにはもう体重なんてないから、ソファがあたしの重みでくぼむ事はなかった。

そこが透明人間と違うところ。

あたしの隣には、品のよさそうなばあちゃんが座っている。

ばあちゃんは不意にあたしを見つめた。

と思ったけど、あたしの後ろにある整理番号が表示される電光掲示板を見てただけやった。

ふうー。

残念なような安心したような。

周りを見渡すと、いろんな物が目に入ってきた。

素人に見せかけたおばはんが、爽やかに笑っている生命保険のポスター。

家族で真新しい家を嬉しそうに眺めている住宅ローンのポスター。

いつのかわからんような女性用の雑誌や釣り雑誌。

若手俳優と若手女優が好きだの嫌いだのちくりあってるドラマの再放送を流してるテレビ。

グッピーとネオンテトラと水草が共存している水槽。

そう言えば、機械で金をおろすことはあっても、カウンターに世話になった事はないかもしれんな。

銀行内を観察するだけでも意外に新鮮で楽しかった。

時間はすぐに過ぎる。

時刻は午後2時59分。

「みなさん、申し訳ないですが、じっとしていてくださいね」

4人の男たちが銀行に入ってきた。

間違いなくコイツらが強盗。

でも、あたしが想像してた強盗とはだいぶ違う。

黒い目だし帽をかぶって、細長い猟銃やら金属バットやらサバイバルナイフやらを持った男たちが、

『動くんじゃないぞ！ちょっとでも動いたぶつ殺すからなあ！』

とか言いながら荒々しく乱入してくる思ってたけど、全く違う種類の強盗団が来たもんじゃないから、逆にビビってしまった。

男たちは、全員黒いシャツに黒いスーツに黒いネクタイ、黒い中折れハットに黒いサングラスという全身真っ黒の出で立ち。

耳にイヤホンでもしてたら、強盗いうよりはどっかのSPに見える。

手にしている武器は、猟銃やサバイバルナイフじゃなくて、リヴオルバーやトカレフ的な片手で扱えるくらいの小さい銃だけ。

この強盗団を『カッコイイ』と表現してもあながち間違いではない。

オシャレ強盗。

素敵犯罪者。

「ルイ」

エンマが低い声で言った。

「ん？」

「コイツらを甘く見るなよ。見栄えはいいが冷酷だ。未来の殺人犯なんだからな」

「わかった。で、誰が殺られる予定なん？」

「さっきお前の隣に座ってたばあさんだ」

あの人…

あたしは、あの品の良さそうなばあちゃんが強盗団のトカレフで頭を撃ち抜かれる事を想像した。

強盗団の薄ら笑い…

客たちや銀行員たちの甲高い悲鳴…

ばあちゃんの頭から噴き出す大量の血…

その血でできた血だまり…

生臭い血のにおい…

絶対にそんな事させへん。

あたしがばあちゃんを守る。

アイツら、絶対檻に入れたる。

今まで悪さをしてきたあたしでも、こんな状況になると正義感というものが沸き上がってきた。

強盗団は、手早く出入り口のシャッターを下ろした。

外界からの隔離。

まあ、あたしだけはいつでも出れるわけやけど。

そもそも中ではあたしはおらん設定やけどな。

強盗団のこの行動は、人質の客たちを外に逃げられんようにするためと、外から人が入ってこんようにするためと、外から中の様子が見えへんようにするため。

でも、あたしにはもう一つ理由があるように思えた。

もう外に逃げられへん、誰も助けてくれへんというプレッシャーを人質にかけ、精神的にも人質を支配するため。

その効果はすぐに表れた。

強盗団が入ってきた直後には何が起こつてんのかわからへんというような表情をしてた客たちが、シャッターが下ろされるのと同時に恐怖の表情を露わにした。

「お嬢さん、すみませんがこのケースに出来るだけたくさん現金を詰めていただけますか？」

口調は疑問系に間違いないけど、それは完全に強制のニュアンスやっただ。

丁寧語が返って強盗団の冷酷さを表しているように見える。

「は……い……」

『お嬢さん』と呼ばれた若い女性銀行員は、震えながら消え入るような声で返事をした。

自分が銀行員になった事を今ほど後悔した事はなかったに違いない。

女性銀行員は、強盗がカウンターに優しく置いたアタッシュケースを持ち、奥の部屋へ進もうとした。

「どこへ行くんです？」

強盗がトーンを少し低くして聞いた。

「あの…ここにはお金…ないんです…。金庫へ行かないと…」

ああ、女性銀行員、呼吸困難に陥ったような話し方になってもうてる。

「ああ、それもそうですね。では、見張りを付けさせていただきます。構いませんか？」

一応確認はしとるけど、こんなやつたらうんとかゆえへんやん。

女性銀行員はコクリとうなずいた。

声も出せへんようになったんちゃうかと不安になった。

「おい」

強盗は、人質にリヴォルバーの銃口を向けて威嚇している仲間を呼

んだ。

「お前が見張りにいけ」

銀行員や人質たちに対する言葉遣いとは全く違う命令調。

やっぱりコイツがリーダーなんやろう。

部下には厳しいらしい。

リヴォルバーを持っていた強盗はしつかりうなずくと、カウンターを軽ろやかな身のこなしで乗り越え、女性銀行員の後ろに立った。

女性銀行員の腰の辺りには銃口がピッタリとつけられている。

「お嬢さんに乱暴なマネすんじゃないぞ」

リーダーはリヴォルバーに乱暴に言った。

リヴォルバーはもう一度うなずくと、女性銀行員と共に奥の部屋へと消えていった。

「さて、少しヒマになってしまいましたね。どうしましょうか」

リーダーは、初めて人質たちを見ながら言った。

人質たちの背筋が一斉に伸びるのがわかる。

自分たちに向けられている銃口よりも、今は銃を手にしていないリーダーの方が遙かに恐ろしいという事にそこにいる全員が気付いていたから。

リーダーのジャケットの胸の辺りがいびつに膨らんでいるのを全員

がわかっていたから。

全員が、人間の本能で、一番の危険人物を察知していた。

「みなさん、どうなさったんですか？せつかくのこの時間を楽しみましょう」

リーダーは楽しそうに笑っている。

理解不能。

「ふざけんな…」

危険を察知しているはずのサラリーマンが言った。

怖いもの知らず。

「何です？」

リーダーは威圧的な声で言った。

この男は、サラリーマンが何を言ったのかわかっている上であえて聞き返している。

サラリーマンにチャンスを与えたんかもしれん。

今『なんでもない』と言えば、見逃してくれるはずや。

サラリーマン、チャンスを無駄にすんなよ。

「ふざけんなって言ったんだ。こんな状況で何をどう楽しめっているんだ！」

やっぱりな。

まったく、せつかくの配慮を。

大学生風の女性と制服の女性が、サラリーマンとリーダーを交互に見ている。

お願いだから、反抗しないで――

じっとしてて――

そんな風に思っている表情。

まあその反応は正しい。

誰でも、いらん事すんなって思うのが当然やもんな。

「なら、死にますか？」

リーダーはジャケットの内ポケットに、指を滑り込ませた。

楽しむか死ぬかしかない選択肢。

やっぱりこのリーダーは普通じゃない。

リーダーのその行動を見たサラリーマンの顔は青ざめ、腰を抜かしたようにその場に崩れ落ちた。

粹がんな、ヘタレが。

リーダーは座り込んだサラリーマンを見ながらニッコリ笑った。

嫌な笑いではなく、穏やかで優しい笑み。

逆に怖い。

リーダーは終始ニコニコし、時々鼻歌を交えながら、仲間が金庫から戻ってくるのを待っていた。

女性銀行員とリヴォルバーが奥の部屋へ入ってから5分ほど経つと、2人はアタッシュケースを重そうにかかえながらリーダーの所に戻ってきた。

「遅かったな」

リーダーがリヴォルバーに冷たく言い放った。

「すみません」

リヴォルバーはリーダーに頭を下げた。

「中身を確認させていただきますね」

リーダーは女性銀行員にさわやかな笑顔を向けた。

女性銀行員はその素敵なお顔を少し顔を赤らめた。

お前は、いつでもどこでも色恋かいな。

さっきまで震えてたくせに。

リーダーはアタッシュケースを開き、帯のついた札束をパラパラと確認している。

ところでコイツら、急ぐ気とかはないんやろか。

さっさとせえ。

「大丈夫ですね。では、私たちはこれで失礼します。お騒がせしました」

ホンマにね。

大騒ぎですよ。

リーダーがそう言い、全員がホッとした時、カタカタと不吉な物音が聞こえてきた。

カウンターの向こう側にいた男性銀行員が、四つん這いになって何かをしようとしてるんが見えた。

カウンターの真下に設置されている緊急時用の赤いボタンを押そうとする。

このボタンを押すと自動的に警察に通報される仕組みになっている。

コイツアホやなあ。

がんばるんはいいけど、もっと上手いことやれや。

地べたに座らされている人質たちは、カウンターの向こう側は見えてへんから物音の正体もわからへん。

でもリーダーはずっと立ってるからそれが何なんかをしつかり把握した。

「そのボタン、押したいみたいですな」

リーダーの手にはすでにトカレフが握られている。

銃口は、真っ直ぐに男性銀行員の頭に向けられていた。

「押してもいいですよ。あなたの命と引き換えならね」

リーダーは穏やかな表情でとんでもないことを口走った。

男性銀行員は、マンガの登場人物のようにゴクリとつばを飲み込み、その場でおとなしくなった。

「おいとましようと思っていた所ですが、彼のせいで気分を害しました。なのでもう少し怖い思いをしてもらいましょう」

人質たちはたぶん、あの男性銀行員の事を一生恨むやろう。

そんな気配が重々しく漂っている。

「ど、どうせ撃てないんだろ？その拳銃は見せかけなんじゃないのか？」

今までなんにも言わずに様子を見ていた初老の男性がリーダーに言った。

また新しいアホが出てきた。

男性の奥さんらしき女性が男性の腕をつかんだ。

やめてください、余計な事しないで――

「何ですか？」

リーダーは男性を見た。

サングラスのせいで目は見えへんはずなのに、リーダーが目を細めるんがわかった。

「お前たちが持つてるそれは、おもちゃなんじゃないかと聞いているんだ」

男性は比較的ハッキリした口調で言った。

初老といったは失礼な年なんかもしれへん。

アホやけど、さっきのサラリーマンよりは根性ありそつや。

でもあんた、あれは本物なんよ。

残念やけども。

「これがおもちゃだとおっしゃるんですね？」

リーダーはトカレフを手で弄びながらニツコリと笑って言った。

「ああ」

男性はだんだんと強気になってきている。

あのリーダーでもそろそろ怒り出すんじゃないやろか。

「では、確認しましょうか」

リーダーはトカレフの銃口を男性の太もも辺りに向けた。

こらアカン。

アイツ、ホンマに撃ちよるわ。

リーダーが引き金を引いた瞬間、銀行内に凄まじい銃声が響いた。

銀行員と人質たちは全員キツく目をつむってる。

が、撃たれたはずのあの男性の悲鳴がいつまでも聞こえてくる。へんから、全員がほぼ同時に目を開いた。

男性の太ももは何ともなっていない。

そらそうや。

だって、あたしが弾止めたんやもん。

銃口から弾が飛び出した瞬間、弾を一瞬その場に止め、それから床に落とした。

リーダーは床に落ちている弾を見て、首をかしげた。

射撃の腕には自信があったらしい。

「何故ここに弾が落ちているのかはわかりませんが、とにかくこれがおもちゃじゃないという事はわかっていただけたかと思います」

さきほどまでいきり立っていた男性は、首がもげるんじゃないかと思うくらいコクコクとうなずいた。

「あなた、死にたいんですか？いい加減にしていただきたいんですがね」

リーダーは頭の後ろに目でもついているかのように、振り返らずに

言った。

リーダーに『あなた』と呼ばれたのは、初老の男性ではなく、カウンターの内側であの赤いボタンを押そうとしている男。

さっきのヤツとは違う男。

この銀行では、一体どんなマニュアルがあるんか知りたくなった。

強盗が入ってきたらバレても懲りずにボタンを押せ、とか？

カウンターの内側では男が冷や汗をかいている。

今回ボタンを押そうとした男は、小太りで、なんらかの役職に就いていそうな風貌。

「あなたみたいな人の為に犠牲になる方はかわいそうですね」

リーダーは溜め息混じりに言った。

どういう意味やろっ…

あたしがその意味を考えようとした瞬間。

リーダーのトカレフの銃口は、あのばあちゃんの頭に向けられていた。

誰かが余計な動きをすれば、他の誰かの頭が吹っ飛ぶという事か。

とんでもない悪徳ジェントルマン。

「あなたのせいでこのご婦人は死ぬ事になりました」

リーダーはまたもやニコリと笑いながら言った。

今から銃をぶっ放すという表情では絶対でない。

「やめてください！撃つなら私を撃ってください」

小太りは顔を真っ青にしながらリーダーに懇願した。

「駄目です。あなたが死んだら責任がなくなります。自分のせいで
なんの関係もない人が死んだという事実を一生背負っていきたく
ない」

非道。

「そんな…」

小太りの目には涙がたまっている。

あんな事言われたら、誰でも泣きたなるわな。

でも大丈夫。

あんたはそんなに苦しんでいいから。

「さようなら」

リーダーは赤ちゃんを目掛けてためらいなく銃を撃った。

「一体どうなっているんだ…」

リーダーは、誰も傷つける事なく床に着地した弾丸を拾い上げてつぶやいた。

もちろん今度もあたしの仕業。

ばあちゃんも助かったことやし、そろそろ終わりにしよかな。

まず、強盗団の銃を奪い取る事にした。

とりあえず、一番ヒマそうにしてるやつ^の銃を無理矢理奪い取り、リーダーが銃を持っている右手に向かって投げ飛ばした。

「え？」

あたしに銃を奪われたやつはアホみたいな声を出した。

投げ飛ばした銃は見事にリーダーの右手に命中し、リーダーはトカレフを落とした。

今度は、その落ちたトカレフを隣にいるリヴォルバーの手にあてる。

そつやって落ちた銃をまた次のやつの手に当てていく。

4丁の銃が全て床に落ちると、それをまとめて銀行の一番端っこに滑らせた。

この一連の動作に要した時間は2秒くらい。

強盗たちは、もちろん何が起こったのかわかってない。

お互いの顔を不思議そうに見合っている。

こんな事は幽霊の、なおかつポルターガイスト能力者のあたしにし
が出来まい。

へっへっへ。

さて、一番に行動を起こすのは誰かな。

「っ、捕まえろー!!」

そう叫んだのは、一度心が折れたサラリーマン。

立ち直りが早い。

サラリーマンのこの一言で、その場にいた男性全員が強盗団確保に
励んだ。

この強盗団、武道派ではないらしく、銃を取り上げられるとたちまち弱くなり、銀行員たちに簡単に取り押さえられた。

小太りは、今度は堂々とあの赤いボタンを押した。

あたしは、ちょっとした好奇心と遊び心で、強盗団のサングラスと中折れハットを動かしてみた。

リーダー…

あんだ…

ハゲとるやないか。

台無しやわ。

そんな事をして遊んでる間に、パトカーのサイレンが聞こえてきた。

さすが、迅速。

大学生っぽい女の人が、意外な強力で出入り口のシャッターを押し上げ、外に到着した警察官を呼びにいった。

その様子を見ていると、あのばあちゃんが近づいてきた。

え？

近づいてきた？

あたしに？

「ありがとうね」

ばあちゃんは間違いなくあたしに言った。

だって、しっかり目合ってるし。

「えーっと…ばあちゃん、あたしが見えてるん？」

ばあちゃんは、元々しわくちやの顔をさらにしわくちやにさせて笑った。

「見えてるよ。さっきからずっといただろ？あたしの隣に座ってた」

じゃあ、ばあちゃんが電光掲示板を見てると思った時、ホンマはやっぱりあたしを見てたんかもしれへんな。

「うん」

「あたしは、昔からあんたみたいなのが見えるんじやよ」

「へえー、大変なんやな」

知らんけど。

「大変な時もあるけど、今日みたいに得する事だつてある」

「得？」

「助けてくれたあんたに、直接礼が言えた」

めっちゃ嬉しかった。

「礼はいらんよ。これがあたしの仕事やから」

「仕事？」

「まあ、いろいろあるんよ」

「そうかい」

ばあちゃんの顔はまたしわくちやになった。

ばあちゃんとの会話を終えると、さっきの大学生が呼んできた警察官がわらわらと銀行内に入ってきた。

予想以上に人数が多い。

警察官がきたなら、あたしがここにいる理由はもうない。

「ばあちゃん、あたしもう行くわ」

ばあちゃんはゆらりと手を振った。

あたしももちろん振り返す。

銀行の外に出ると、やたらと気持ちが悪かった。

天気がどうか気温がどうかではなく、人を守ったという事が気持ちよかった。

「やっぱりお前、こういうの向いてるんじゃないか？ すごいスツキリした顔してる」

エンマがからかうように言ってきた。

「うるさい」

「褒めてんに」

「もう！うるさい」

とは言ったものの、エンマに言われた言葉もあのばあちゃんに言われた言葉も嬉しくて仕方なかった。

でも、その事をエンマに気付かれなくなかった。

あまのじゃくなあたし。

さっそく次の仕事を探そうとした時、30歳くらいで背の高いすくなくキレイな人がいる事に気がついた。

銀行の中をものすごい剣幕で睨みつけている。

幽霊のあたしでも寒気を感じるほど、恨みのこもった目つき。

この人がこんだけ憎んでる人がこの銀行内にいるって事なんやろか。

中にいた人たちを思い出してみた。

恨みを買つような人はおらんかったような気がする。

あの強盗団以外には。

でもまあ、この人が誰をどれだけ恨もうが正直あたしには関係ない話。

「お前、気付いてねえだろ」

エンマが低い声で言った。

若干の狼狽の色を感じる。

「何に？」

「その女、生身の人間じゃねえぞ」

驚いて、女をもう一度見た。

不覚にも目が合ってしまった。

女はカッと目を見開いた。

ヤバイ。

直感的にそう感じ、あたしは即座に走り出した。

あゝもう!!

飛びたい!!!

幸いにも、女があたしを追いかけてくることはなかった。

こっわゝ

あたしが走り疲れてゼエゼエいいながらガードレールに座っていると、エンマが労いの言葉をかけてきた。

「おつかれゝ。でもさ、何もこんなとこまで走らなくてもよかったんじゃないか？」

「だってめっちゃ怖かったんやもん！本気で殺されるかと思ったもん！あの人なんなん？」

あたしは涙声でエンマにうったえた。

「何って、生き霊」

「怖すぎるわ！！」

「俺にキレられてもなあ。俺が作り出したわけじゃねえし」

「まあそうやけどさ。今外に生き霊がおりとか言ってくれてもいいやん」

「ああ、ごめん。怒ったあゝ？」

エンマの謝罪は空気よりも軽かった。

謝る気があるんかないんか疑わしいな。

あたしはエンマを無視した。

「ルイちゃん、ごめん」

甘えられても無視。

そのあとエンマは甘え口調で何回か謝ってきた。

あたしはそれをことごとく無視。

「ちっ」

おうおう、舌打ちですか。

「聞こえてんで」

「ごめん」

もうええわ。

幽霊VSアホ強盗

「あんたが悪いんだからね！」

包丁をキツく握りしめている女がヒステリックに叫んでいる。

「あんたが… あんな女と結婚するなんて言うから！」

ずっと付き合っていた男が、突然、妊娠した自分より年下の女と結婚すると言い出したため、この包丁女は激怒している。

男は額に変な汗を滲ませながら、わなわなとしている。

まあ確かに浮気は悪いと思うわ。

しかも妊娠させてもってるし。

でも、殺されるほどの非ではないんじゃない？

経験したことないからわからんけど。

浮気した女と結婚するという理由のみで殺されかけているこの男は、
今何を考えてるんやろか。

包丁女、たぶんあんたがそんなやから浮気されたんやと思うで。

もっと、なんて言うか、ほら。

なあ？

あたしは今、エンマから報告を受けた未来の殺人事件を阻止しよう
としている。

場所は、とあるマンションの一室。

嚴重なセキュリティのマンションにも関わらず、あたしは難なく侵入した。

だって、壁とか通り抜けられるんやもん。

でも、宙に浮くことは出来ひんから、住人と一緒に大人しくエレベーターに乗って参りました。

だって1人やつたら、エレベーターに乗り込めても、ボタン押せへんから動かんねもん。

幽霊が出るという話はたまに聞くけど、もしかしたらあたしみたいに宙に浮けへんからエレベーターを使ってるだけなんかもしれへんと思った。

自分を怖がっている人間を見た幽霊は、申し訳ない気持ちになってるのかも。

あ、ごめん。

ビビらすつもりはなかったんやけど。

的なノリで。

殺人を食い止めるんは結構な事やけど、こっつい痴話ゲンカの延長みたいなんはちょっとイヤやねんなあ。

なんか…

こっつい女を見ると、胃にもたれる。

あたしも気イつけよう。

って、もう死んでるし痴話ゲンカもくそもないか。

「やめろ！俺が悪かった！でもやっぱり…俺は彼女の事が好きなんだ！」

あゝあ。

どう考えても最後のいらんやろ。

逆なでするだけやで。

「殺す…あんたを殺してあたしも死ぬー！！」

ほら、みてみい。

包丁女が浮気男に猛烈な勢いで突進していく。

男は恐怖のせいで足が動かんようになったんか、その場で固まっている。

情けない男や。

元々は自分で蒔いた種のくせに。

あたしは、包丁女の手元に、洋服だんすの上に置いてあった写真立てを飛ばした。

写真立ては女の手に命中し、女の手から包丁が放れた。

今度はその包丁を部屋の隅に追いやった。

拾われたらアカンからな。

銀行強盗の時とおんなじやり方。

包丁女は、包丁が吹っ飛んだ事には気付かず、床に放り出された写真立てに目を奪われている。

そこには、包丁女と浮気男が仲良く手をつないで写っていた。

2人とも表情は明るい。

幸せそうに笑っている。

そんな大事なものの、ふっ飛ばして悪かったかな…

ちょっとだけ反省した。

包丁女の目にはいっぱい涙が溜まっていた。

女の手から包丁を放すためだけに投げつけた写真立てが、意外な効力を発揮してくれている。

もう殺意は感じひん。

「ごめん…なさい…」

包丁女が泣き崩れた。

「もついいんだよ」

浮気男が包丁女の肩に手を置いて言った。

この男、腹立つ。

自分は全面的に善やと思つとる。

自分は一切悪くないと思つとる。

包丁女の押し付けがましい愛も確かに悪い。

でも、包丁女と付き合つたまま浮気に走つたんは完全に浮気男が悪い。

包丁女がいやなら、キツパリ別れてから他の女と付き合つべきやっ
たんや。

……あたしはなんでこんな事考えてるんやろ。

コイツらの恋愛事情なんかどうでもええやん。

「ルイ」

エンマの声がやけに真剣。

イヤな予感がした。

「はい」

「コイツらはもう大丈夫だから、次の仕事だ」

「次はどこに行ったらいいの？」

「俺が連れてってやる。目つむれ」

あたしは素直に、エンマの言つとおり目をつむった。

すると、すぐに温かい光のようなものに包まれた。

… ような気がした。

だって目つむってるからわからんねもん。

「目、開けていいぞ」

それは一瞬やった。

宙に浮いた感じもなかったのに、もう着いたらしい。

閻魔ってやつばすげえな。

ゆっくり目を開けると、そこは知らん場所ではなかった。

この間の銀行のすぐ近くの住宅街。

と言っても高級住宅街では絶対にならないから、真新しい家が建ち並んでるわけではなく、耐震強度なんて最低ランクやろうと思われるような古い家が並んでいる。

年寄りがいっぱい住んでそんな雰囲気。

「……?」

「そうだ」

「何が起きるんか、教えてもらっていいですかね」

エンマは少しの間沈黙した。

「銀行に、お前の事が見えたばあさんがいただろ?」

「うん」

「あの人^が襲^がわれる」

「え…誰に…？」

あたしは、ちょっとしゃべっただけのあのばあちゃんが結構好きや
った。

だから、あの人が襲われるって聞いて動揺した。

もう会う事はないやろって思ってたし。

「強盗」

「また？」

死ぬ予定やった日にせつかく助かったのに、また襲われるなんて…

やっぱり未来は変わらへんって事なん？

「世の中にはついてねえヤツもいるって事だ」

「時間は？」

刑事のような聞き方になってしまった。

「午後8時43分」

現在の時刻、午後8時10分。

あと約30分。

「あの人の家、どれ？」

「外壁が茶色で瓦屋根の家だ。そこから見えるだろう？」

エンマが言った家はすぐにわかった。

今いる場所から10メートルくらい離れた場所。

家の前まで行くと、思ったよりも遥かに大きい事がわかった。

「でかつ。あのばあちゃん、金持ちやったんや」

庭に池でもありそんな雰囲気。

鯉とか飼ってたりして。

有り得る。

石で出来た表札には『村瀬』と彫られている。

3段ほどの石段があり、それを上がると門があった。

門を通り抜けて、20歩ほどあるいてやっと玄関に到着する。

門と玄関の間は庭のようになっていて、そこには犬小屋があった。

『小次郎』とやたら達筆で書かれた板がかかっている。

中を覗いてみると、やる気のなさそうな柴犬が目を閉じて寝そべっていた。

「よう、コジロウ」

なんとなく声をかけてみた。

すると、コジロウはチラリとあたしを見た。

数秒間見つめ合った後、コジロウは何事もなかったかのようにまた目を閉じた。

元々あたしの事が見えてへんのか、あたしに興味がないんかはわからへん。

でもたぶん後の方。

コジロウにはあたしが見えてる、そんな気がした。

あたしは壁でも何でも通り抜けられるわけやから、別に玄関から入る必要もないんやけど、やっぱり玄関から入るんが礼儀やと思った。

幽霊でもそれくらいはねえ。

ただ、いくら幽霊とはいえ、不法侵入には違いない。

礼儀もなくでもないやないか。

いや、もうホンマにごめんなさいね。

でも、インターホンが押せへんからその辺は勘弁してください。

押したら押したでまたおかしな光景が広がるんやしさ。

「お邪魔します」

とりあえずあいさつはしてみた。

自分にしか聞こえへんくらいの小っさい声で。

頑丈そうな引き戸を通り抜けると、そこには信じられへんくらいの

広さの玄関が広がっていた。

なんや、コレ。

何城やねん。

靴を脱いで家の中に入った。

常に靴ははいてるんですよ。

裸足で歩き回る訳にはいかんからね。

村瀬のばあちゃんの家の中は、なんとなく懐かしい匂いがした。

おばあちゃんの匂い…。

ばあちゃん自身がそうであるように、家の中も品がいい。

というより、余計な飾りものが一切ない。

虎皮の絨毯とか、シカの頭の剥製とか、ゴージャスなシャンデリアとか、猟銃とか日本刀とか、昼ドラの金持ちの家にあるようなものはなく、すごくスッキリしていて気持ちよかった。

長い廊下を歩いて、突き当たりにリビングがあった。

リビングというより、居間って言った方がいいのかな。

薄型の液晶テレビではなく、箱のような四角いテレビが堂々と居座っている。

広々とした畳の上には、大きなコタツがあった。

今の時期にはまだ必要ないので、コタツ布団はない。

何が入ってたのかわからん小さい棚の上には写真立てが2つ並んでいる。

白黒でなかなか男前の男の人が写っている写真と、カラーで満面の笑みを浮かべている男の人が写っている写真。

「白黒の方が旦那で、もう一つの方が息子だよ」

『カラー』という表現をド忘れしたに違いない。

でも、気付かんかったフリしとこ。

ばあちゃんが、お茶とせんべいを持って今に入ってきた。

今まで台所にいたらしい。

コタツの上に湯呑みが2つ置かれた。

このばあちゃん、あたしが家に勝手に入り込んでる事をつくに知ってみたい。

「幽霊は、お茶飲める?」

ばあちゃんがゆっくりと言った。

どうなんやろ。

死んでからは腹も減らんし、何にも食べてへんからなあ。

「今日だけ特別に飲めるようにしてやるよ。どうせだからせんべい

も食っていいぞ」

エンマが言った。

よかった。

感謝です。

せっかく出してくれはった物に手をつけへんのはマズいし。

って、まあせんべい食いたいだけやけど。

「飲めるらしい」

ばあちゃんはニツコリ笑った。

あたしがお茶をすすってる間、ばあちゃんはずっとあたしの顔を見つめていた。

「おいしい？」

「うん」

完全におばあちゃんと孫の会話が成立している。

あたしはそれが嬉しかった。

久しく触れていない温かさ…

「ところであんた、一体何しに来たんだい？」

ばあちゃんは、見た目と言葉遣いのギャップがある。

そんなところもまた良い。

「それはちよつとまだ言えへんのやけど」

未来を人間に教えたらアカンってエンマに言われてる。

未来を事前に知り、それを变えていいのは、神様と閻魔とあたしの
ような立場の幽霊だけなんやって。

ちよつと優越感。

あたし、結構すごいやろ？

「まあ、とにかくゆっくりしていきなさい。あんたは悪いもんじや
なさそうだから」

「ありがと。ばあちゃんさ、村瀬さんっていつんやね」

「そつだよ、村瀬菊乃。あんたは？」

「ルイ」

「そつかい」

時刻は午後8時40分。

あと3分。

「ルイ、そろそろ来るぞ」

エンマが心配そうに言った。

でもあたしは大丈夫。

だって結構強いから。

「わかってる」

ソワソワしてる訳でも緊張している訳でもないのに、心臓がドキドキしてる。

最近是人助けが楽しくて仕方ないから、ワクワクしてるんや。

武者震いってやつ？

あたしにはもう、命の危険なんてないはずやから。

テレビで流れている清涼飲料水のCMが携帯電話のCMに切り替わった瞬間、その時はやってきた。

突然、玄関の方からけたたましい破壊音が聞こえた。

鍵か戸自体をぶっ壊したに違いない。

あんなに頑丈そうな戸をぶっ壊せるやなんてよっほどの怪力が、あの戸が見た目より頑丈ではなかったんか。

「何の音？」

ばあちゃんが慌てた様子を見せずに言った。

このばあちゃん、ちょっと鈍いんかも。

銀行でも、強盗が入ってきた事に一番最後に気付いたんがこの人やし。

ばあちゃんはゆっくりと立ち上がった。

足が悪いみたいで、立ち上がり方がぎこちない。

玄関の様子を見に行くために立ち上がったらしい。

「あ、ちょっと待って。あたしが見に行ってくるから」

どうせあたしの姿は向こうに見えへんやろから恐々行く必要もなく、堂々と強盗の姿を確認しに向かった。

ヤツらはまだ玄関にいた。

「誰かいるかな」

「別にいても構わねえよ。殺っちまえばいいんだから」

強盗たちは声を潜める様子もなく、ニヤニヤ笑いながら話している。

あたしの想像通りの強盗さん。

1人は営業マンのような声で、もう1人はいかにも悪そうなガラガラ声。

2人ともサングラスをしていてハッキリ顔は見えへんけど、結構若いという事はわかった。

もしかしたらあたしとあんまり変わらへんかも。

強盗はまだ、ばあちゃんがいることに気付いてない。

出来れば気付かんといてほしいんやけど、まあそれは無理な話。

「すつげえ金ありそうじゃねえ？」

営業マンが卑しい声で言った。

あたしはその声に寒気がするほどの嫌悪感を感じた。

「だからこの家にしたんだろうが」

ガラガラ声がイライラしたような声で答えた。

2人は最初に応接室のような部屋に入った。

応接室で。

どんだけ金持ちやねん。

「おい、全部ひっくり返して根こそぎ持って帰るぞ」

ガラガラ声は言った。

営業マンは締まりのない顔でうなずいた。

ソファやテーブルを全部ひっくり返しても、金目のものは出て来なかった。

透明のガラステーブルまでひっくり返した時に、あたしはコイツらの頭の悪さを認識した。

だって、ひっくり返さんでも下丸見えやん。

次に2人が入ったんは寝室。

2人がかりで、セミダブルのベッドをひっくり返した。

ばあちゃん、ベッドで寝てるんや。

お年寄りは布団で寝るもんやと思い込んでたから、単純に関心した。

ここでも収穫はなし。

寝室を出てすぐ隣には階段がある。

2人は迷わずに2階に上がった。

もちろんあたしもついていく。

まだ1階探し終わってへんのに2階行くとか、なんぼほど要領悪い

ねん。

いちいち一緒に行動せんでも手分けして探せばいいのに。

やっぱり2人ともアホや。

こんなアホに殺られる予定になっているばあちゃんが気の毒でしゃあないわ。

結局、2階ではなんにも見つけれへんかった2人はまた下におりた。

2人が部屋を荒らすのはおとなしく見てたけど、もしなんか盗ろうとしたら阻止するつもりやったのに。

不法侵入の時点で追いつ返すべきなんかもしれんけど、出来るだけ未来を変えると言われてるので仕方ない。

だからあたしは、窃盗とばあちゃんの殺害のみを阻止しようと思う。

エンマから具体的な指示はいつもないけど、あたしの行動に文句を言った事はないから、あたしの判断は間違っていないんやろう。

2人は徐々にはあちゃんのいる居間に近づいている。

そろそろばあちゃんに強盗の事を知らせようと、あたしは一端居間に戻ることにした。

「遅かったね。何だった？」

あたしが居間に戻ると、ばあちゃんは暢気にお茶をすすっていた。

やっぱりまだ強盗に気付いてない。

「ばあちゃん、落ち着いて聞いてな。

今、この家の中に強盗が2人おるねん。

2人ともまだばあちゃんがここにいる事に気付いてない。

でもだんだんここに近づいてるねん」

あたしは、ばあちゃんを慌てさせへんように慎重に話した。

「そうかい」

ばあちゃんは他人事のような返事をした。

いや、もし他人事であっても強盗が入ったと聞けば多少は慌てるはずや。

予想以上に鈍感なんか、ものすごい肝がすわってるんかどっちかや。

どっちにしてもすごい。

「貴重品はどこにしまってんの？」

あたしにはこの家の財産を守るといふ仕事もある。

そう思ったら、また気合いが入ってきた。

「全部この部屋だよ」

ラッキー。

手間が省ける。

だってもうあのアホな強盗についてまわらんでいいし。

アイツら見てたらイライラすんねん。

「あんだ、もしかしてまたあたしを守るために来てくれたのかい？」

ばあちゃんはちっこい体をあたしの方へ向けた。

これは…

言ってもいいんかなあ。

「まあ、そんな感じ」

問題ないと勝手に判断した。

エンマにまた怒られるかもなあ。

「ありがとうね」

「まだ守りきったわけじゃないから、礼は早いで」

それでもばあちゃんはニツコリ笑った。

ばあちゃん、あんたが襲われるんはこれからやねんで。

もうちょっと自覚してほしいもんやわ。

「なんだよこの家。全然金ねえじゃん」

居間の隣にある台所から営業マンの声が聞こえてきた。

それでもばあちゃんは落ち着いてる。

ここまでくれば、鈍感とかでは絶対はない。

恐れ入りました。

「もっとちゃんと探せよ。もう、あとこの部屋だけなんだからよ」

ガラガラ声がそう言いながら、濃紺の暖簾をくぐって居間に入ってきた。

ガラガラ声とはあちゃんの目がピッタリと合った。

「あ、ヤベ」

ガラガラ声は驚きのせいか、ガラガラではない声を出した。

にしては、出て来た言葉が軽すぎる。

絶対にヤバいとは思ってない。

ガラガラ声は赤ちゃんから目を逸らさへんかった。

もちろんばあちゃんも。

「この家には何もないよ。さっさと帰んな」

いつもの柔らかい声とは全然違う。

「そんなわけにはいかねえよ。俺らだってこれで食ってたんだから。それに、この家に何も無いなんてありえねえ」

ガラガラ声は口角の片側だけをつり上げて笑った。

卑劣な笑い。

嫌い。

「おい」

ガラガラ声が、まだ台所を物色している営業マンを呼んだ。

「ばあさんがいた。殺るぞ」

「OK」

営業マンもガラガラ声と同じ笑い方をした。

さっきまでどんくさいと思ってたヤツらが、急に冷酷な人格に変わった。

人間は誰でも二重人格者。

営業マンがばあちゃんの後ろにすばやく回り込み、ばあちゃんの両手を後ろで抑えた。

ばあちゃんは足をバタバタさせて抵抗しているが、若い男の力に勝てるはずもなかった。

ばあちゃんがいくら暴れても、営業マンは笑ってるだけ。

コイツら…

ホンマ最悪。

あたしの心は一瞬にして凍った。

死ぬほどビビらしたる。

ガラガラ声は、嬉しそうにはあちゃんの首にナイフの先を突き付けた。

ばあちゃんはさらに暴れる。

「ばあさん、暴れると切れちゃうよ」

ガラガラ声はそう言って、ばあちゃんの首にさらにナイフを食い込ませた。

ばあちゃんの首からはツーツと一筋の真っ赤な血が流れ、白いカーディガンに染み込んだ。

それを感じたんか、ばあちゃんの顔は真っ青になっている。

あたしは営業マンの手元やポケットを確認した。

どういわけかコイツは何の武器も持っていない。

まさかの丸腰。

あたしは、ガラガラ声が握っているナイフを上引っ張り上げた。

ガラガラ声はナイフの柄を握ったまま。

「なんだ…これ…」

ガラガラ声は、自分の意に反して上へ上へと上がっていくナイフとそれを掴んでいる自分の腕を、気味の悪いものでもみているような目で見ている。

いや、これは確かに気味が悪い。

ガラガラ声、あんたのリアクション大正解。

「何やってんだよ。早く殺っちまえ」

営業マンが、目の前でナイフ相手に乱舞するガラガラ声に言った。

「違うんだ！ナイフが勝手に！！」

異常に慌てるガラガラ声の心境に気づきもせずに、営業マンはイライラしている。

仲間割れ。

いい感じ。

あたしはそのナイフで、ばあちゃんの両手を押さえつけてる営業マンの左手をちょっとだけ切りつけた。

ホンマにちょっと。

ちょっとだけ。

「痛っ」

イラッ。

営業マンは、大した事のない切り傷に大袈裟な声を上げた。

こういう奴らは、他人の痛みには鈍感でも自分の痛みには恥ずかしいくらいに反応する。

でも今回の場合は、得体の知れないものにやられたという恐怖も混ざってるんじゃないけど。

「よくわかんねえけど、コレぜってえやべえよ！」

2人はばあちゃんを放して、慌てて逃げだそうとした。

まだ。

まだ逃がさへん。

《待て》

あたしは2人の頭に直接話しかけた。

怖さが半減したら困るから、関西弁は一時封印。

直接頭に言葉を送り込んだんは、死んでから初めて。

けっこっ…

しんどい。

「お前、今何か聞こえなかったか…？」

「聞こえた」

2人は明らかな動揺を見せた。怯えている。

2人の顔全体から大量の汗が噴き出した。

というより、顔から出ることの出来るあらゆる液体が流れ出ている。

かわいそうに。

よっぽど怖いんやね。

でも…

まだ終わらへんよ。

あたしは、2人の顔面に向かってナイフを飛ばした。

もちろん、顔面に刺す気はない。

ナイフが刺さったのは、2人の顔と顔の間の壁。

2人の顔は真っ青になり、膝がガクンと曲がった。

座り込んだ身体全体が震えている。

失禁でもしそうな勢いやけど、迷惑やからやめてや。

そんな2人の胸に、容赦なく腕を貫通させた。

エンマから教えられた人間にはいけない事のうちの一つ。

人間の心臓部位に腕を貫通させると、その部分に寒気を感じると同時に破裂寸前まで鼓動が高まり、呼吸困難に陥る。

要するに、死にそんな状態を体験するって事。

2人の顔は真っ青から真っ赤に変色した。

お前らリトマス試験紙か。

忙しいのう。

営業マンの目は充血し始めた。

そろそろか。

あたしは、2人の胸から腕を引き抜いた。

2人は一気に咳き込み、さらに激しく震えだした。

逃げたくて仕方ないのに、恐怖で足がすくみ、動けへんらしい。

はっ。

自業自得じゃ、ボケ。

《今すぐこの家から出て行け》

あたしがまた念力を使うと、2人は顔を見合わせ、同時に全力疾走で逃げ出した。

たった2言を送り込んだだけなのに、ひどい頭痛を感じた。

うっすら汗もかいてるし、ちょっと息もあがってる。

「このために来てくれたんだねえ」

あたしがガラガラ声と営業マンを痛めつけるのを黙って見ていたばあちゃんが、いつもの柔らかい口調で言った。

「まあな」

「2回も助けてもらって、本当になんてお礼を言ったらいいか…」

ばあちゃんは『2回』と言ったけど、あたしにはこれで終わるとはどうしても思えへんかった。

この人は、たぶんまた危ない目に合う。

これはあやふやな予感ではない。

絶対的な確信。

「気にしんといて」

あたしはそんな不吉な確信をばあちゃんに悟られんように、精一杯の笑顔を向けた。

ちよつと不自然やったかも。

あたしは間違っても女優にはなれへん。

「また会えるかい？」

「どうやらな」

ここで『また会える』と言ってしまえば、軽い忠告にはなるはずや
った。

でも、余計な不安は与えなくなかった。

忠告なんかせんでも、あたしが絶対守ったるから。

ばあちゃんにバイバイと言い、入ってきた時と同じように玄関から出た。

今度はばあちゃんに聞こえるようにお邪魔しました、というあいさつをして。

「ちょっとやりすぎだな」

玄関を出た瞬間にエンマの声が聞こえてきた。

「言われると思ったわ」

「まあでも、出来るだけ未来を変えるなど言ったのは俺だし、ばあさんが殺られる直前まで我慢した事は誉めてやる。お前は偉いよ、よくやったな」

エンマは、仕事が終わると必ず誉めてくれるようになった。

あたしはそれが嬉しかった。

だってあたし、誉められて伸びるタイプですから。

正義VS憎悪

「あ、ルイ」

甲高い声であたしを呼んだんは、幽霊友達のカズサ。

街をプラプラ歩いてたら、あ、間違えた。

街をパトロールしてたら、突然声を掛けてきたんがこのカズサやった。

初めは、靈感のある人間が声を掛けてきたんかと思ったけど、話を聞いているとどうやらコイツにも体がないという事がわかった。

カズサはあたしよりもずいぶん幽霊歴が長い。

かれこれ20年はこの世を彷徨ってるらしい。

でも、あたしみたいな『仕事人』ではなく、ただ成仏出来ひんだけの幽霊。

カズサは20年前、心臓の病気で死んだ。

小さい頃からずっと病気で、死んだ時の年齢は18歳。

それから20年経ってるわけやから本来ならあたしよりかなり年上やけど、死ぬとそれ以上年を取らんらしいから見た目は18歳のまんま。

でも、20年間ずっとおんなし服を来てるから今のファッションセンスからはかなりずれている。

でもレトロでちょっとかわいい。

カズサには当時、恋人がいた。

お互いがお互いをすごく大切に思っていて、みんながうらやむカッブルやったらしい。

でも、カズサは突然の発作で死んだ。

恋人に何の言葉も言えずに死んでしまったから、それが申し訳なくて、今も成仏出来ないでいるらしい。

恋人に取り憑いているわけでも、他の女を寄せ付けへんためでもなく、恋人の幸せを見届けるためにまだこの世にいるんやって。

中途半端な存在のまま20年。

成仏してしまえば楽になれるってわかってるはずなのに、それでも彷徨ってる…

あたしは自分が楽になるためにこの世から消えようとした。

カズサは苦しむってわかっててこの世に残った。

そんな正反対のあたしたちが友達になれるなんてな…

やっぱり幽霊って不思議。

「仕事は順調ですか？」

ちなみに、カズサは空を自由に飛べる。

「うん、まあ。っていうか今も仕事中やし」

あたしは、コンビニで万引きをしようとしている小学生の男の子を見張っていた。

「あの子を見張ってるの？」

そう言った声がなんとなくおかしかったから、カズサの顔を見た。

不安そうな、心配そうな、それでいてとても大事なものを見ている
時のような目をしている。

「知ってる子？」

「うん…ちょっと…」

誰なんかは言いたくないみたいやから、聞かへんかった。

男の子が自動ドアから外に出ようとした。

出てしまうと万引きを阻止した事にはならんから、男の子が出られへんようにドアを開かんようにした。

男の子は開かへんドアを目の前にあたふたとし始めている。

ドアの前に敷いてあるマットの上でピョンピョンと飛び跳ね出した。

焦っているせいか、リズムはバラバラ。

その様子に気付いた店員が、男の子に声をかけた。

「開かないの？おかしいなあ」

店員も男の子と同じようにマットの上で何回か跳ねた。

店員が隣に来たことによって、男の子の緊張はピークに達したのか顔面蒼白になっている。

「一緒にジャンプしてみてくださいないかな」

男の子は店員にそう言われ、ある重大な事に気がついたようである。

自分が飛び跳ねると、万引きした商品がポケットから飛び出すんじゃないかという事。

かと言って、ここでじっとしてたら返って怪しまれるんじゃないかという事。

そこで男の子が出した結論は、ポケットを押さえながら飛び跳ねるというものやった。

ぎこちない動きやけど、店員にバレんように一生懸命がんばってる。

あたしから見れば、男の子の行動はかなり怪しいけど。

あたしは、そんな男の子のポケットから、万引きした商品を外に飛び出させた。

その商品を店員にわからんように元の位置に戻す事も出来たけど、あえて店員の目の前に落とした。

今ここで男の子を甘やかして助ける事よりも、ちゃんと叱ってもらおうと思ったから。

店員は落ちている１００円ライターを拾い上げた。

この子、なんでこんなもんパクろうと思ったんやろうっ…

「どついう事かな。これ、ここの商品だよ。悪いけど、ちょっと事務所まで来てくれるかな」

男の子はすでに反省した様子を見せ、しっかりとうなずいた。

つれていかれたのは、レジの奥の狭い空間やった。

事務所と呼べるかどうかは微妙。

物置にしか見えへん。

防犯カメラの映像が映っているモニターが2つと、事務机、社員やバイトのためのロッカーが置いてある。

店員は、事務机の前の向かい合わせに置かれたパイプ椅子に男の子を促した。

あたしは2人の横に仁王立ち。

隣にはなぜかカズサもいる。

男の子はうつむいたまま、きつちりと足を揃え、膝の上にはキツく握った拳を置いて座っている。

よく見ると、その拳は震えていた。

そんな男の子の様子を見た店員は、それまで厳しかった表情を突然緩めた。

パンダに似てる。

「そんなに緊張しなくていいよ」

頭ごなしに叱られると思っていたらしい男の子は、パンダの優しい声にキョトンとしている。

「大丈夫。叱ったりしないから」

あ？

叱らへんの？

ふうん。

「どうして持って帰ろうとしたの？」

『盗む』『盗る』という表現を使わなかったパンダをリスペクト。

男の子はまだうつむいたまま何にも言わへん。

「言っでいらん」

男の子はパンダの顔をチラッと見た。

コイツはホンマに叱らへんかどうかを見定めてるみたい。

パンダはニツコリ笑ってうなずいた。

益々パンダに似た。

「お父さんが…」

「うん」

パンダは優しく続きを促した。

「お父さんが…目を覚ました時に、すぐにタバコを吸えるように隣に置いておいてあげたかったんだ。でも、僕全然お金持ってなくて

…「めんなさい」

「お父さん、病気なの？」

男の子はブンブンと首を横に振った。

「事故にあって…ずっと目を覚まさないんだ」

男の子のこの話が嘘やとは思えへんかった。

パンダもそう思ったみたい。

哀れむような目で男の子を見ている。

パンダは突然立ち上がり、事務所から出て行ってしまった。

男の子は、店員のその行動の意味がわからなかったみたいで、首をかしげた。

でも、あたしにもカズサにもこのパンダが何をしようとしているのかがわかった。

あたしでもおんなじことするかもしれない。

数十秒後、事務所に戻ってきたパンダの手には白い箱が握られていた。

「これでもいいかな。何がいいかわからなかったから、とりあえずコレ持ってきたんだけど」

パンダは、セブンスターにさっきの１００円ライターを添えて男の子に渡した。

「ライターだけじゃタバコは吸えないよ。これ持って、お父さんの

所に言つてあげなさい」

男の子はパンダの顔を凝視した。

怒鳴られへんかっただけじゃなく、タバコまでもらえた事に心底驚いている。

「さあ」

パンダは男の子を立たせ、背中をポンと押した。

「ありがとう」

男の子はパンダを振り返り、満面の笑顔で言った。

初めて見た男の子の笑顔は、日光を浴びた水面のように輝いていた。

このコンビニが繁盛することを願いましょう。

男の子に続いて、清々しい気持ちでコンビニから出た。

カズサもついてくる。

「あんな店員もいるんだな。ほぼパンダだったけど」

エンマが感心した様子で言った。

あたしとおんなじ事思っとなるわ。

「なかなかおらんやろけどな」

「あんなヤツばっかりなら、世界は平和なものにな」

「世界が平和やったら、あんたの仕事減るで」

「最高だな」

「働け、アホ」

閻魔大王に向かってアホとか言ってよかったのかな。

言ってもうた後に気になった。

「うるせえ、バーカ」

オーケー、ノープロBLEM。

「ルイ」

今度はカズサがあたしを呼んだ。

忙しい。

「ん？」

「ありがとう」

カズサに礼を言われるような事をした覚えはない。

意味わからん。

「は？何が？」

「あの子を万引き犯にしないでくれて」

「それがあたしの仕事やから」

やっぱりカズサはあの子を知ってるんやな。

「あの子ね、リヨウジの子なんだ」

リヨウジというのは、カズサが20年間思い続けてる人の名前。

リヨウジが幸せになるのを見届けるために、カズサはずっとこの世に残ってる。

「そうやったんや。でも、子供がいるなら結婚してるんじゃないの？」

それでもまだカズサがこの世にいるという事は、リヨウジは幸せな結婚生活に恵まれへんかったって事なんかなあ。

「うん、結婚はしてる。」

でもあの子は奥さんの連れ子で、リヨウジの本当の子供じゃないんだ。

それに、あの子がさっき言ってたように、リヨウジは結婚してすぐに事故にあって、今もずっと意識不明のままなの……」

カズサはたぶん、リヨウジが結婚した時に上に行こうとしたんやと思う。

でもカズサが上に行く前に、リヨウジは事故にあった。

カズサが望んでるリヨウジの幸せは、リヨウジ自身だけじゃなくて、奥さんも子供も、リヨウジに関わるすべての人の幸せなんやと思う。

だから、リヨウジの意識が戻って、家族みんなで普通に生活出来るようになっただけで、カズサは上に行けるんや。

「ねえ、ルイ。病院に行かない？」

断る理由なんかなかった。

初心者のスカイダイビングのように、あたしはインストラクター的なカズサに後ろから抱き抱えられて、宙に浮いている。

5階にあるリヨウジの病院の窓から侵入するため。

いちいちエレベーターに乗って行くよりは断然早い。

リヨウジは、キレイな個室のキレイなベッドでキレイな顔をして眠っていた。

カズサの話では何回も聞いたけど、実際にリヨウジを見るんは今日が初めてやった。

でも、どっかで見たとがあるような気がする。

どこで見たんやろ…

まあいつか。

この人とあたしはあんまり関係ないんやし。

「顔にはあまり傷はつかなかったみたい」

そう言ったカズサの顔を見ると、カズサはリョウジの顔を愛おしそうに見つめていた。

カズサの顔から視線をずらしていくと、ベッドに頭を乗せてすやすやと眠っているさっきの男の子の姿が目に入った。

この子は、リヨウジが自分のホンマの父親じゃないって知っていてもこんなにもリヨウジを慕っている。

たぶん、リヨウジもこの子を大事に思ってるに違いない。

親子っていうのは、血のつながりはなくても気持ちがつながってれば、それで充分なんやな…

「お父さん…」

男の子が寝言を言った。

あたしは…

リヨウジが一刻も早く目を覚ます事を強く願った。

神様は随分とめんどくさがりらしいけど、切実な願いなら叶えてく

れるんちゃうかな。

エンマも力貸してな。

「頼んどいてやるよ」

声に出して言ったわけではないのに、エンマはあたしの気持ちをわかってくれた。

ありがとう。

「リュウ、いるの？」

女の声でその名が呼ばれた。

あたしの心臓は一度大きく弾んだ。

リュウ……？

「ん？お母さん？」

ムクツと起き上がった男の子は、まだ眠たそうな目をこすりながら
声がした方に顔を向けた。

「あ、リョウジの奥さんが来たみたい」

という事は…

リュウというのはこの子の名前か…

違う人間やとわかっていても、その名前を聞くと胸がしめつけられ
る。

息が苦しくなる。

心臓が騒ぐ。

あたしは…

まだこんなにあの人の事…

「ルイ、行こう」

カズサはそう言って、あたしを再び抱きかかえた。

窓をすり抜けて、飛び降りる。

やっぱり、奥さんの顔を見るのは辛いのかなあ。

それとも、家族3人の時間を邪魔したらアカンと思ったんかなあ。

地上に到着すると、カズサは「じゃあ、またね」と言ってどこかに行ってしまった。

幽霊同士のバイバイはいつもこんなに軽い。

だって、いつでもどこでもまたすぐ会えるんやから。

あたしが村瀬菊乃さんと何度目かの再会を果たしたんは、偶然やった。

エンマからばあさんを助けに行けと指示があったわけではなく、ホ
ンマにたまたま出会った。

ばあちゃんの家に強盗が入ったあとにも、あたしは自分の予想通り

に何回かこの人を助けていた。

赤信号を無視してはあちゃんに突っ込んできそうやった車のタイヤを寸前でパンクさせたり、ばあちゃんの頭の上に落ちてきそうやった鉄工をちよつと位置をずらして落としたり。

このばあちゃん、不運極まりない。

信号無視の車とか鉄工とかって、不運の代表やん。

この日、公園をパトロールしていたら、ばあちゃんがコジロウを連れてやってきた。

「おう、ばあちゃん」

「ああ、ルイちゃん」

幽霊と人間でもこんな普通の会話が出来るんやで。

「今日も仕事かい？」

「っていうか、仕事探してるよ。ばあちゃんは、あれから危ない目に合ってるん？」

エンマからの情報がなかったから、たぶん大丈夫やろうとは思ってた。

「人や物に襲われるという事はなかったけど、ちょっと階段から落ちちゃったね」

ばあちゃんは照れ笑いを浮かべながら、包帯を巻いた左腕をあたしに見せた。

階段か。

これも代表やな。

「大丈夫？骨、折れたん？」

「折れてはいないんだけど、ひびが入ってるらしくて。その方が返って治りにくいみたいでねえ」

「そつかあ。でも、ばあちゃん一人暮らしなんから氣いつけなアカンよ」

「いつもいつもありがとね。今度またうちに遊びにおいで」

「うん、ありがと。じゃあ」

あたしはばあちゃんに手を振って公園から出た。

まあは言ったけど、たぶんもうあの家に行くことはないやろな。

さすがにもう襲われへんやろ。

「いや、お前は近いうちにまたあの家に行く事になる」

エンマはいつも急に話しかけてくる。

しかも、あたしの心を読んで。

なんか悔しい。

全部顔に出てるんかなあ。

「どういう事？また誰かに襲われるって事？あのばあちゃんばかりおかしいやん」

これはもう不運という言葉で片付けられへんくらいの不運か、もしくは誰かの陰謀やん。

誰の？

「あのばあさんの家に強盗が入ってわかった時にはすでに何かおかしいと思ってたんだが、今回でハッキリわかった」

嫌な予感がガンガンした。

具体的な事は何一つわからんけど、とにかく悪い予感がした。

神様、どうか気のせいでもありますように。

「あのばあさんは、恨みを買ってる」

神様のアホ。

「誰から…？」

「ばあさんが銀行強盗に殺られそうになった時に、銀行の外に女の生き霊がいただろ。アイツだ」

カツと見開かれたあの女の目を思い出してゾツとした。

あの女…

あの日、銀行内にいたばあちゃんを見てたんや…

でもあのばあちゃんが人に恨まれるような事をするやろつか…

あの人に一体何をしたんやろ…

「あの人は何で…生き霊になるほどの恨みをばあちゃんに持ってるん…？」

「それは…」

あたしはエンマの声に、いつも以上に神経を集中させた。

「わかんねえ」

.....はい？

「わからんって何よ！」

「俺にだってわかんねえことはあんだよ。」

あの女がばあさんに強い恨みを持つてる事はわかるが、その理由は本人にしかわかんねえだろうが。

みんなお前みたいに単純に作られてねえんだよ」

最後の言葉は無視する事にした。

いちいちつかかってたら話が進まん。

確かに、言われてみればそうや。

人の気持ちを100%わかるなんてあり得へんもんな。

ただ、あたしにはエンマの心の中がちょっとだけわかる。

まだ他に何かある。

「なあ、エンマ。まだ他に何かあるんちゃう？ばあちゃんが恨みを
買ってるって事だけちゃうんやろ？」

「ああ……」

あんまりいい話ではなさそうやな。

エンマが言いにくそうにするんは、珍しい事やった。

「ばあさんが何回も危険な目にあってるのは…

偶然じゃないんだ。

全部あの女の仕業だ。

たぶん、階段から落ちたっていうのもな」

偶然じゃない？

全部あの女の仕業？

「あの女の生き霊が、生きた人間を操ってたんだ。

その人間に取り憑いてな。

これはあくまで推測だが、銀行強盗の時はあのリーダーに取り憑いて、リーダー自身と仲間たちを操っていた。

この間の強盗はガラガラ声の方に取り憑いて、営業マンの方も操っていた。

階段から落ちた時はどうやったのかわからないが、とにかくあの女の仕業に違いない。

ただ、階段の時は、未来ではあさんが死ぬ予定はなかったから俺も察知出来なかった。

すまない」

それがホンマやったら…

偶然じゃなくて計画。

でも…

それなら、ばあちゃんはあの女に命を狙われてるって事になる。

「今エンマが言った事がホンマやっていう確率は？」

「残念だが、ほぼ100%」

それなら問題ない。

ここまでハッキリわかってるなら、あたしがばあちゃんを全力で守ればいいってだけの話なんやから。

むしろ、敵がわかってやりやすくなったくらいや。

「たぶん、お前は近いうちにあの女と直接会う事になると思う。いくら仕事と行っても、相手は生き霊だ。行かなくてもいいんだぞ」

「アホか。逃げるわけないやろ」

「そうか…」

「もう一つ、今までお前に言わなかった事がある」

緊張した。

エンマの声が、暗く、低くなったから。

「お前は死んでる。肉体がないわけだから、もう命に関わるような危険はないと思ってるだろ？」

「うん…」

「でもな…それは違うんだ。」

人間は、肉体が死ぬと魂だけの存在になる。

今のお前の状態がそれだ。

しかし、魂だけの存在でも全く危険がないわけじゃない。

つまり、人間は二度死ぬ事だっである」

一度死んだ人間がもう一度死ぬ…？

「じゃあ例えば…あたしが今の状態で死んだら…どうなるん…？」

聞くのは怖かった。

でも、聞かへんわけにはいかんし、どっちにしてもエンマはきつと続きを話すやろう。

「天国にも地獄にも行けない。

生まれ変わる事も出来ない。

自分以外誰もいない、正真正銘の真つ暗闇の中で、正体のわからない不安と恐怖に永遠に付きまとわれる」

そんなところに行ったら…

あたしはどうなってしまっんやろっ…

きっと誰にも想像出来ひん事なんやろっけど…

「その中では、強制的にずっと正気のままにいさせられる。

気が狂う事も許されない。

地獄の方がまだマシだと思えるような場所だ。

地獄でなら発狂してもかまわないからな。

俺たちはそこをグレイブと呼んでいるが、そんなのん気な場所では絶対じゃない」

グレイブ…

墓場…

墓場をのん気な場所と表現できるほどの場所…

グレイブに匹敵するほどの恐怖を体験した人間はいるんやろうか…

「お前が今もう一度死ねば、間違いなくグレイブに送られる」

あたしはうつむいた。

怖いからじゃない。

もう一つ、気になる事があったから。

「じゃあ生き霊が…」

あの人が生き霊の状態のまんまで死んだらどうなの…？

グレイブに行くの…？」

「いや、あの女の肉体は生きてるから大丈夫だ。

ただ、魂が先に死ねば肉体の方も二度と目を覚まさない。

ただし、肉体の基本的な機能は変わらない。

心臓も動くし、呼吸もちゃんとするはずだ。

見た目は眠っているように見えるが、目を覚ます可能性はゼロ。

本当の抜け殻になっちまう」

あたしは、ばあちゃんを守るために、自分も死なずにあの人も抜け殻にさせずにする方法を考えて。

いくら考えても、あたしのからっぽの頭では答えはみつからへんってわかってたのに。

エンマの話を聞いてから、あたしの気持ちは常に張り詰めていた。

いつあの人があるんか、気が気でなかったから。

「ルイ、どうしたの？最近ずっと眉間にシワ寄ってる。それに、全然笑わないし」

カズサが不服そうな、でも心配そうな表情であたしを見つめている。

「ゴメン…笑ってる場合じゃないねん」

「理由はあたしにも話せない？」

「ゴメン…」

もし話せば、カズサを巻き込む事になるかもしれんから。

「ふうん。だったら、あたしずっとルイについてまわるから。四六時中離れないから」

予想外の反応やった。

物分かりのいいカズサならわかってくれると思ったのに。

そんな事されたら、確実にカズサを危険な目に合わせる事になる…

やめさせな。

「それは絶対にアカン」

「危ない仕事なんでしょ？」

だったらあたしにも手伝わせてよ。

ルイはさ、あたしに何も話してくれないよね。

どうして仕事人なんてやってるのかも教えてくれないし。

あたしたち友達じゃないの？

少なくともあたしはそう思ってるよ。

だからさ、もっといろいろ話してほしい。

もっと頼ってほしい。

もっとあたしを信頼してほしいんだよ。

全部1人で抱え込まないで、あたしにも分けてよ。

ね？」

カズサはそう言ってあたしを抱きしめた。

幽霊にも体温はあるんや…

固まっていたはずの気持ちは、カズサの体温によって簡単に溶かされた。

あたしはリュウの事、エンマの事、自分の葬式の事、自分がなんで仕事人をやっているかという事、村瀬のばあちゃんの事、あの女の事、グレイブの事、抜け殻の事、そしてこれからやらなアカン仕事

の事、すべてをカズサに話して聞かせた。

あたしが話してる間、カズサはたまに相づちを打ってくれるくらいで、余計な事は一切言わへんかった。

これだけ長い話をしたんは初めてやったし、これだけ長い話を飽きずに聞いている人も初めてやった。

「ルイ、がんばろうね。これから、どんな時でもあたしが隣にいてあげるから。一緒に戦おう」

嬉しかった…

カズサはばあちゃんに何の思い入れもないはずなのに、あたしの為に命を懸けると言うてくれてる…

「エンマ…あたし、カズサと一緒にがんばってもいいかなあ…」

エンマに話しかけると、自分の周りの空気がふっと温かくなった。

これはきっと、エンマの心の温かさなんや…

「お前1人で全部やれなんて言った覚えはねえぞ。ただ、俺は手伝ってやれねえけどな」

そんな事ない。

あたしはエンマの優しさと温かさについていつも助けてもらってるよ。

でも、調子に乗ったらウザいから絶対そんな事は本人に言わへんけど。

「ルイ、俺の素晴らしい言葉に酔いしれてるところに申し訳ないんだが、今あまりよくない情報が入った」

もれなく調子には乗るらしい。

カズサがあたしの顔を見た。

今まで聞こえへんかったエンマの声が急に聞こえるようになったから、ビクビクしてるんやと思う。

「どんな？」

「あの女、お前の存在に気づき始めてるようだ」

さっきまで温かった周りの空気は一気に凍りついた。

あまりの温度差に塵気楼が見えそうや。

あの人が…

あたしの存在に気づいた…？

「あのばあさんを何度殺そうとしてもなかなか死なない。

初めは向こうもただの偶然だと思ったんだろうけど、これだけ偶然が続く事はまあない。

そうなれば、何か他の存在を疑うようになるのが当然だ。

誰かがばあさんを守ってるんじゃないか、誰かが自分の邪魔をしてるんじゃないかってな。

でもたぶん、その誰かが天城ルイという幽霊だという事にはまだ気づいてない」

向こうも、自分に敵がいるって認識し始めてるって事やん。

でも、いつかは絶対にバレるし、あの人には遅かれ早かれ会わなアカン。

それやったらいつその事…

「あの女にとって邪魔な存在がお前だとバレる前に、お前の方から近づくか？それとも、知らないふりをして出来るだけ時間を稼ぐか？」

1 + 1の答えを聞かれるよりも簡単な質問。

「エンマ。あんた、今まであたしの何を見てきたん？そんな質問、する意味がない」

「お前、俺より男前なんじゃねえか？」

「当たり前や。だってあんたに育てられた仕事人やもん」

あたしは大空に向かってピースサインを出した。

「そうだったな。悪かった。でも、気をつけるよ」

「わかってる。グレイブには死んでも行きたくないから」

「よし。じゃあカズサ、ルイを手伝ってやってくれな」

エンマに初めて話しかけられたカズサは物怖じする事もなく、あたしと同じポーズをとった。

大空に向かって思いっきりピースサイン。

「了解」

心強い相棒が出来た。

エンマから連絡が入ったのは、それから3日後。

いくら閻魔やからつて、あの人の居場所を常に把握しているわけではなく、ばあちゃんが危険な目に合う直前でないとわからへんらしい。

上のテクノロジー…

もうちょっと進化してほしいもんや。

ギリギリじゃないとわからんとか、厄介この上ないやないか。

「来るぞ。ばあさんの家にあの女が直接乗り込んでくる」

「いつ？」

「今から20分後だ」

あたしとカズサは、ばあちゃんの家から5分くらいの場所にいた。

カズサに運んでもらってもいいんやけど、出来るだけ早く行きたい。

「エンマ、悪いけど…」

「言われなくても連れてってやるよ」

そう聞こえた瞬間に、全身が熱くなった。

カズサの体も淡い光に包まれている。

2人で同時に目を閉じた。

次に目を開けた時、あたしたちはばあちゃんの家の方の門の前に立っていた。

門を入った所には、相変わらずコジロウが仏頂面で寝そべっている。

コジロウは、片目だけであたしとカズサの姿を確認すると、すぐに興味を無くしたように目を閉じた。

何だ、またあんたか――

ご無沙汰してます――

まあ、入んなよ――

コジロウとの心のキャッチボール。

幽霊は、動物とも植物とも話せるんかしれんな。

様々な壁を超えた存在。

それが魂。

あたしとカズサはちっさい声でお邪魔します、と言って玄関の戸を
通り抜けた。

ばあちゃんは、前と同じように居間にいた。

テレビを点けて、それをコタツに入って観ている。

テレビ番組を観ているという雰囲気ではなく、ただそこにある四角
い箱を眺めているだけという感じ。

なんか…

ばあちゃんがちっちゃく見えるんはなんでやろっ…

あと15分。

あたしたちはばあちゃんのいる居間には入らずに、ばあちゃんからは見えへん廊下の端っこに座った。

出来れば、あたしがここにいる事に気付かれなくなかったから。

あたしが近くにいる＝悪い事が起こるという事に気づかへんほどアホではないやろっし、ギリギリまで余計な不安は感じさせたくなかった。

あと10分。

「ねえ、ルイ。あのおばあちゃん、何かいいね。懐かしい感じがする」

カズサが穏やかな声で言った。

今から何が起きるかわからんのに、落ち着き払ってる。

あたしなんかよりも仕事人に向いてるんかもしれへんな。

強い心。

折れへん気持ち。

それは覚悟を決めた時にあられるもんなんやと思う。

死ぬ覚悟ではなく、何があっても死なへんという覚悟。

生きる覚悟。

幽霊のあたしに生きる覚悟っていうのはちょっとおかしいかもしれへんけど、生きてる時よりも死んでからの方がしつかり『生きて』るような気がする。

「うん。だから、どうしても死なせたくない。何があっても守ってみせるから」

「そうだね」

カズサはそう言ってあたしの手を握った。

幽霊になってから、生身の人間に触れる事が出来ひんようになった。

だから、人の温もりを感じる事が出来るんはカズサと一緒にいる時だけ。

カズサは、今のあたしにとってのビタミン。

なくてはならないもの。

特にあたしは…

人の何倍も温もりが恋しくて、人の何倍も温もりを欲してしまう。

カズサは、そんなあたしの気持ちをわかってくれてるんやと思う。

あたしたちはそれから数分間、何の言葉を発する事もなかったけど、相手の気持ちが自分の気持ちよりもわかった。

いつも以上に穏やかで、心が凪いでいる。

あと3分。

そんなあたしたちの中に荒波が押し寄せたんは、エンマが予告した時間ピッタリやった。

とてつもない空気が家の中に充満する。

悪意の塊。

姿はまだ見えへんけど、深く黒いベトベトした何かがあたしたちにまわりついてきた。

胸が押しつぶされそうな強い感情。

体が痛い…

胸が苦しい…

カズサを見ると、カズサも苦悶の表情を浮かべている。

「カズサ…大丈夫…？」

「うん…。でも…こんなに強い感情…初めて…」

それはあたしもおんなじやった。

ここまでの恨みを持つあの人が、ばあちゃんに何をされたんかがまだわからへん。

「あたしの邪魔をしていたのは…あんたたち？」

あの女が、突然あたしたちの前に現れた。

「この子は関係ない」

あたしは、張り付いた声帯を無理矢理こじ開け、なんとか声を出した。

カズサを自分のうしろに隠すようにする。

女の姿を見たカズサは、目を大きく開き、唇を震わせている。

恐怖ではなく、驚愕の表情。

カズサは一体何に驚いてる？

女の感情の強さに？——…

「まあ、別にどっちでもいいわ。でも、まだ邪魔するなら、あなたたちには消えてもらう」

「そういうわけにいかんねん。どうしても、あのばあちゃんを死な

せたくないから」

女にそう言った後、女には聞こえへんくらいの声でうしろのカズサに言った。

「カズサ、ばあちゃんのとこ行って」

すぐに反応してくれへん。

あの表情を浮かべたまま固まっている。

カズサの顔に浮かんでる表情が、どういふ種類のものなんかかわからへん。

それはこの女の顔を見た瞬間に表れた。

一体なんなんや…

「早く！」

その疑問を説明すんのは後でいい。

今は行動する事が先や。

「う、うん」

やっと反応してくれたカズサは、さっと居間に入った。

きつとばあちゃんは、いきなり知らん幽霊が入ってきてビックリしてるやろうけど、今回カズサがいてくれてホンマによかった。

1人じゃなくてホンマによかった。

タイムンなんて言葉は、必要ない時だってある。

卑怯とか言ってる場合じゃない。

「へえ、あの人あの部屋にいるんだ。わざわざ教えてくれてありがとうね」

惑わされるな。

あたしを動揺させるために言った言葉に決まってる。

「知ってるくせに」

女はあたしを鼻で笑った。

「とにかく、どいてくれない？あんたがそこにいたら殺りに行けないじゃない」

「行かんでいい。帰れ」

「無理。お前が帰れ」

あたしは爆風を食らった。

その風で体が中に浮き、吹き飛ばされた。

壁に頭を思い切りぶつけて、一瞬意識が飛びそうになる。

というか、飛んだ。

こういう場合は壁を通り抜けられへんらしい。

もう。

あたしが起き上がれずにもがいている間に、女はどんどん居間の方へと歩いていく。

あたしへの当てつけか、女はあたしを見ながら歩を進めた。

コイツ…

性格悪っ！

なんとか起き上がり、できる限り急いで居間に行くと、カズサが女に捕まっていた。

首を鷲掴みにされている。

苦しそうなカズサ。

そんなカズサの横でブルブル震えているばあちゃん。

ばあちゃんにはカズサが女に首を絞められている情景が見えてるはずやけど、見えたからと言って生身のばあちゃんには何をする事も出来ひん。

「カズサ！」

あたしは、コタツの上に置いてある湯呑みを女の頭に向かって飛ばした。

湯呑みは女の頭をフワリと通り抜け、無残に床に破片を飛び散らせただけやった。

あたしの能力は、自分とおなじ存在には何の効力も発揮しいひんらしい。

ならどうする…？

あたしにこの人を止める事が出来る…？

「ルイ！あんたも幽霊でしょ！」

カズサが苦しそうな声で叫んだ。

ああ、そうか。

あたしも幽霊。

能力は役に立たへんくても、あたし自身は使えるんや。

カズサ、ありがとう。

「うらああああー！」

あたしは女の頭に後ろから思いっきりヘッドバッドを食らわせた。

この人は幽霊じゃない。

でも今、肉体はない。

だからこそあたしの能力は効かへん。

でも、体のないもの同士なら、わざわざ能力を使う必要がない。

直接触れる事が出来るんやから。

肉弾戦なら任せえ。

女は後頭部を押さえ、床にひざをついた。

カズサの首から女の手は離れている。

カズサはひどく咳き込んだ。

よっぽど強く掴まれていたんやろつ。

カズサの首には女の手の後がくつきりと浮かび上がっている。

カズサ…

ごめんな…

「ルイちゃん…」

ばあちゃんがあたしを見て言った。

この人も、恐怖とは違う表情を浮かべている。

ただ、カズサに浮かんでいたものともまた違う。

今この部屋にいる4人の中で、何も知らんのはあたしだけやと確信した。

何や…

さっきのばあちゃんの震え、ばあちゃんとカズサのあの表情。

どういふ事なんや…

何かが浮かび上がってくる事を期待して、あたしはぎゅっと目をつむった。

すると、期待通りに何かひっかった。

これは…

目を開き、周りを見渡した。

この部屋に何か重要なものがある。

何を探しているのか自分でもはっきりわかってへんかったけど、とにかく探した。

この部屋にある何かを。

ある物の所で自然に目が止まった。

ああ、これが…。

それを見た瞬間にカズサの表情の意味も、ばあちゃんの表情の意味も、この女がばあちゃんを恨んでる理由もわかった。

それは、初めてこの家に来た時にはつきりと見たものやった。

2つの写真立て。

白黒のものとカラーのもの。

そのうちのカラーの方に写っている男の人。

あれは…

間違はなく、リヨウジ。

カズサの永遠の想い人で、ばあちゃんの息子で、この女の旦那で、リユウの父親。

カズサはあの女がリヨウジの嫁やと知っていた。

だから必要以上に驚いてたんや。

あたしが戦おうとしてるんが、自分の想い人の嫁やとは思ってなかったやろうから。

そう言えば…

リヨウジの病院に行った時、どっかで見た事があると思った。

あの写真やったんや。

あの女がばあちゃんを恨んでる理由。

それはたぶん、ばあちゃんがリヨウジの事故になんらかの形で関係してるんやろう。

ばあちゃんのあの表情は…

たぶん全部知ってたから。

女が自分を恨んでるということも、今までの事が全部女の仕業やと
いうことも。

そしてたぶん…

ばあちゃんはそれを受け入れようとしていた。

でも、そのたびにあたしが助けてしまった。

あたしが必死で助けるもんやから、自分が殺されてもいいと思っ
ているということを言えへんかったんやろっ…

それがわかると、女に対しての恐怖心が一気に弱まった。

女はあたしのヘッドバットの余韻を残しながらも、すでに立ち上
っている。

「邪魔すんなって言ったでしょう！」

女はあたしをまた吹き飛ばした。

この女は気功のようなものを扱えるんやろうか。

あたしみたいに風を動かしているという感じではない。

あたしはまた壁に体をぶつけた。

その瞬間、女に首を掴まれた。

体は言う事を聞いてくれず、文字通り手も足も出せへん。

キリキリと女の細長い指があたしの首に食い込んでくる。

女の目は…

真夜中のトンネルよりも、海の一番底よりもずっとずっと暗かった。

「リョウジ…さんは…まだ…死んでへん…やん…」

吐き気をもよつしながらも、なんとか声だけは出せた。

「ちゃんと…」

生きてんのに…

がんばって生きよう…

してんのに…

ばあちゃんを恨んで…

復讐なんて…

おかしいと思わへんの…？」

女は指にさらに力を加えた。

目に光が戻ることもない。

このまま絞められ続ければ、あたしは死ぬ。

「ばあちゃんが…」

どろろという風に…

事故に…

関係してるんかは…

わからへん…。

でも…

リュウはばあちゃんの事…

恨んでへんのと…

違う？

人を…

恨む事よりも…

お父さんが目を覚ます事だけを…

願ってるんやで…。

そやのに…

母親のあんたは…

人を恨むことだけ考えてて…

それで楽になろうとしてるんと…

違う…？

リュウが…

お父さんのために万引き…

しようとしたことも…

知らんやろ…？

よう考えて…みて…。

リョウジの事故は…

ホンマに…

ばあちゃんのせい…？

死ぬほど考えて…

それでもやっぱり…

ばあちゃんのせいやって…

いうんやったら…

殺したらいいやん…。

あたしは…もう邪魔…しいひんから…。

あんたは知らんかもしれんけど…

ばあちゃんは…

あんたになら…

殺されてもいいって...思ってるん...やで...」

最後の一言は賭けやった。

『なら殺す』

女がそう返してもおかしくはない発言やって、自分でもわかってる。

でもあたしは、女の最後の良心に賭けた。

「なら」

女の指にはさらに力が入った。

ばあちゃん、ごめんな。

あたし、ばあちゃん守り切れへんかった。

あたしの意識はもうほとんどなく、声もでえへん。

「殺す」

女はそう言った。

言っただけなのに、あたしのほっぺたに生温い何かがかかり、首の圧迫感がなくなった。

あたしは激しく咳き込んだ。

胃が押し返され、猛烈な吐き気も襲ってきた。

あたしがへたり込んでる真ん前に、女もへたり込んだ。

泣いてる。

あたしのほっぺたにかかったものはこの女の涙。

声を押し殺し、肩を震わせて泣いている。

気がつくと、今まで部屋中に充満していた邪気がなくなっていた。

「ごめんなさい」

女は嗚咽を漏らしながら、細い声で言った。

誰に対しての謝罪なんかはわからん。

あたしかもしれんし、ばあちゃんかもしれんし、カズサかもしれんし、ここにはおらんリヨウジかもしれんし、リユウかもしれん。

「本当はわかってました。

リヨウジの事故がお義母さんのせいじゃないって。

というよりむしろ、リヨウジのせいでお義母さんを危険な目に合わせてしまった…」

リヨウジと女の結婚式の日、もちろんばあちゃんも招待された。

披露宴も同じ日に行われたので、帰りが遅くなり、電車もなくなっ
てしまった。

仕方なくばあちゃんは息子のリヨウジに家まで送り届けてくれと頼
んだ。

リヨウジはそれを快諾し、笑顔で女に手を振った。

すぐに帰るから、リユウを連れて先に帰ってくれと。

この時、リヨウジが女とリユウを連れていかなかったのは、リヨウジの家は式場から比較的近くタクシーで帰れる距離やったからというのと、リユウが眠いと言いつ出したためである。

そして――

事故は起こった。

後ろから煽ってきた車を振り払おうと、前方の信号が黄色から赤に変わったにも関わらずに、リヨウジは止まらずに進んでしまった。

すると、リヨウジの車と直角の位置にいたせつかちな車が、目の前の信号が赤から青に変わる前に発進した。

交差点のど真ん中で、2つの車はぶつかった。

相手の車は大破。

運転していた男性は首の骨を折って即死。

リョウジの車を煽っていたスポーツカーは知らん顔で逃亡。

もちろん、行方はわからん。

そうになると、女の怒りの矛先は『送って』と言い出したばあちゃんに向けられた。

リョウジがばあちゃんを送ってなかったら、そもそも事故は怒ってなかったんじゃないかって。

でも、あたしは思う。

リョウジは…

ばあちゃんが頼まんでも、自らすんで送ったんやないか。

たぶん、この女もそれに気付いてる。

「どうしようもなかったんです…」。

お義母さんのせいじゃないってわかっているけど、それでも感情をコントロール出来なかった…。

お義母さんを…誰かを恨まずにはいられなかった…。

そうしないと…自分が壊れてしまいそうだったから…。

お義母さんを恨む事でやっと…自分自身を保っていたんです…。

本当にごめんなさい…ごめんなさい…」

かわいそうな人。

辛かったんやな。

気持ち、ようわかるよ。

でも、やっぱりこの人は忘れてる。

リヨウジは死んでない。

リヨウジが生きてる間には、復讐心なんて持ったらアカン。

生きてる事を否定してるのとおんなじやんか。

「今を悔やむより、これからどうしていくかを考える方が先なんだろう？」

あんたの大切な人は生きてるんやろ？

命がある限り、何でも出来るんやで。

リョウジさんが早く目覚めますように、リュウと一緒に祈ってあげて」

あたしは女の肩に手を置いた。

「あたしはもう死んでるから、あんたみたいにやり直しはきかへん。

だから、出来ればあんたにはこれから後悔しんように生きてほしい。

あたしみたいにならんように……

これからもしあんたに何かあったら、あたしが助けに行くから。

だから、もう自分の体に戻る。

な？」

女は泣き顔のままあたしの顔を見た。

その目に、もう闇はなかった。

「あなたは…天使のような子ね。名前は？」

天使？

いや…

ちょっとお姉さん…

照れるやん。

「天城ルイ。あたしは天使なんかじゃない。堕天使や」

あたしはそう言ってニッと笑った。

女も笑った。

こんなにキレイに笑う人を、あたしは初めてみた。

「ルイちゃん…ありがとう」

女はキレイな笑顔の陰影を残して、ふっと消えた。

自分が本来いるべき肉体に戻ったんやろう。

「堕天使？」

カズサがニヤニヤしている。

「いや！ちゃうねん！あれはさあ、勢いで言ってもうてん！」

うう。

恥ずかしい。

我ながら驚くほど寒いセリフを吐いたもんや。

「堕天使？」

今度はエンマがカズサと同じ言い方であらってきた。

「お前はうるさい」

『あんた』から『お前』に格下げ。

エンマは黙った。

へこんどるわ。

憎たらしいけど、かわいい閻魔様。

「ルイちゃん、本当にありがとう」

ばあちゃんが言った。

「自分は死んでもいいなんて、もう考えたらアカンで」

自分は自殺しといて、ようそんな事が言えたもんや。

「あたしがそう思ってるって、どうしてわかったんだい？」

「それは…あたしが墮天使やから」

こうなったら開き直ってやる。

エンマのクスクス笑いが聞こえてきた。

よし、待っつけ。

しばきたおしに行つたるから。

最終指令

「リョウジ、目覚めました？」

カズサは首を横に振る。

いつもこの繰り返し。

最近、不安になる事がある。

リョウジは…

ホンマに生きてるん？

もしかして…

魂だけが先に逝ってしまってるんじゃないやろか…

もしそうなら、リョウジは2度と目を覚まさへん。

もしそうなら、カズサは永遠にこの世を彷徨うことになってしまう。

でも、その不安をカズサに伝える勇気はなかった。

「早く目覚ませばいいな…」

こう言うのがあたしの精一杯。

カズサは寂しそうな笑顔を向けた。

「そうだね…」

《助けて…》

カズサの声と別の誰かの声が重なって聞こえてきた。

カズサの声は普通に耳から聞こえたけど、もう一つの声は頭に直接響いた。

頭、痛い…

《助けて》

もう一回、さっきの音がさっきと同じように聞こえてきた。

「カズサ、今の声聞こえた？」

「う、うん。助けてって…」

「誰の声に聞こえた？」

「ヒメコさん…？」

やっぱり…

ヒメコというのは、リョウジの嫁の名前。

村瀬のばあちゃんを恨んでたあの女。

「あたしもそう思った。でも、助けてって…なんかあったんかなあ…」

気になって仕方ない。

あの人に何かあったら助けると約束したから。

「お前ら、今の声聞こえたか？」

今度はエンマの声。

いつの間にかカズサも仕事人にされるんちゃうやろか。

そう思うほど自然に、エンマの言葉の中にカズサも含まれていた。

「ヒメコ？」

聞きはしたけど、ほぼ確信している。

あの声を間違っはうがな。

「そうだ。こっやうて今話してゐる時間もない。何があつたか説明し

てる時間もない。飛ばすぞ」

あたしとカズサは返事すらも省いた。

すぐに目をつむる。

いつものように、温かいものが全身を包み込んだ。

熱気がふつとなくなると、目を開けた。

目の前には驚くべきものが広がっていた。

大きな一軒家が、手のつけようのないくらいに広がった真っ赤な炎に包まれて、ゴオゴオと痛烈な悲鳴をあげている。

「何これ……」

状況がわからん。

こじはどじ？

あたしは一体どうしたらいいの？

「じじ…」

カズサは、炎の色をそのまま顔に写して言った。

「じじ、知ってるん？」

「リョウジの家…」

ということは、ヒメコとリュウウの家でもある。

もしかして…

ヒメコはここに…？

「ヒメコ！どこ？！」

声帯がぶち切れるかと思うほどの大声で叫んだ。

「ヒメコ！！」

何回呼んでも返事はない。

ホンマに…

こん中にいるん…？

「ルイ！とにかく火を消せ！お前なら出来るはずだ！！」

あたしになら出来る…

あたしにしか出来ひん…

「来い…」

あたしは必死であるモノを動かした。

風。

火自体を動かす事も出来る。

でも、他の場所に移動するだけで消える事はない。

水を動かす事も出来る。

でも、水は重すぎて、火が消える前にあたしが倒れてしまう可能性があった。

だから、風しかなかった。

体が…

千切れそう…

痛い…

火はなかなか消えてくれへん。

頭が痛い…

お願い…

早く…

まだ消えへん。

《熱い… 苦しい… 助けて…》

これは…

リュウ？！

そうや。

この声はリョウジの息子のリュウや。

《リュウ！聞こえる？！》

あたしは風を火にぶつけながら、リュウの声に応答した。

《お姉ちゃん…誰…？》

リュウからも応答があった。

でも、このまま会話を続けるんはキツイ…

いや、そんな事言つてられへん。

大丈夫…

あたしになら出来る。

《あたしが誰かなんて今説明してるヒマはないねん。あんたは、今どこにいる？》

《家の中》

《わかった。すぐ助けに行くから》

「エンマ！家の中に子供がおる！火が消えるん待つてたら間に合わん！先に助けに行く」

リュウとの会話を中断し、今度はエンマに叫んだ。

大声を出さんでも聞こえるってわかってたけど、そうしいひんかったら体中の痛みや息苦しさに負けてしまいそうやった。

「待て！今この中に入ったら…お前死ぬかもしれねえぞ」

「わかってる。でも、あたしはやっぱりリュウを助けに行く」

死ぬかもしれんのは中にいるリュウも一緒。

今行かんかったら絶対後悔する。

あたしは…

もう二度と後悔したくないから。

「カズサ！何とかヒメコを探して！ひょっとしたら、その辺にいますかもしれんから」

離れたところで呆然としているカズサに叫んだ。

カズサに何かを頼めば、あたしと一緒にいきいひんと思ったから。

あたしが中に入ると言えば、きっとカズサもついてくる。

そんな事は絶対にさせたくなかった。

危険な目に合うんは、あたしだけでいい。

「わかった」

カズサは我に返り、返事をしてくれた。

そして、フラフラと歩き出した。

カズサの様子も心配ではあったけど、とりあえず命の危険はな
いと判断した。

「ルイ！入るな！」

エンマがしつこく引き止めた。

あたしは、空に向かってニッと笑った。

ピースサインも忘れずに。

「いつてきます」

あたしは、燃え盛る炎の中に何の躊躇もなく入った。

家の中は思っていた以上にヒドいものやった。

もくもつと真つ黒の煙が立ち込め、１メートル先も見えへんくらいの状態。

踊り狂う炎に包まれた棚が倒れていたり、元はなんやったんかわからんくらい真つ黒になつてゐる物体が落ちていたりする。

何度かつまづいて、危うくそいつらに突っ込みそうになりながらもゆっくり進む。

《リュウ、どこにいる？》

《動き回つたらわかんなくなっちゃった…》

いくら自分の家とは言っても、この煙では無理もないかもしれへん。

《絶対そこから動いたらアカンで》

リュウがいる場所の状態はわからなかったけど、リュウの様子からして、悲惨な状態ではないやろうと思った。

《わかった》

さっきから、気になっている事がある。

ここに来る前に聞こえてきたヒメコの声が、あれから一回も聞こえてこーへん。

どういう事や。

カズサにヒメコを探してくれと頼んだけど、彼女はたぶん、この中にいる。

ヒメコ…

あんた…

もしかしてもう…

いや、そんな事考えたらアカン。

《ヒメコ…聞こえるなら返事して》

しばらく待つても返事はなかった。

「ヒメコー!!」

頭の中に応答がないなら、直接叫んだ方がいいんじゃないかもしねん。

「ヒメコ!」

とにかく叫び続けた。

「無駄だ。お前の声は聞こえない」

代わりに返事をしたんはエンマやった。

この家に入ってくる時に、死に別れ覚悟でいつてきますって言ったけど…

よく考えれば、コイツには常にあたしが見えてるんやった。

なんとなく損した気持ち。

さっきの笑顔とピースを返せ。

「でも、ばあちゃんの家で会った時はちゃんと話出来たやん！」

煙を大量に吸い込んでいるためか、さらに息苦しさが増した。

吐き気も頭痛もある。

のども痛い。

「あの時はヒメコもお前と同じ霊体だったからだ。今は生身の人間だから無理なんだよ。元々アイツに靈感はない」

あたしの体を、頭から足にかけて柱が通り抜けた。

その瞬間、あたしの体にとんでもない熱が走った。

熱い…

「でもさっき…確かにヒメコの声が聞こえた」

「普通の人間でも、生死の境にいればどんな力でも芽生えるのかもしれないな」

生死の境…

「ヒメコが生きてるかわからんの?! 閻魔ならわかるはずやろ!」

「生きてる。ただ、このままだと死ぬ。だからお前を連れてきたんだ」

そういう事か。

ヒメコはこの火事で命を落とす予定になっている。

ヒメコを死なせへんようにするんがあたしの仕事やったんや。

でも、それならなんで、エンマはあたしに火を消せって言ったんやろっ…

そんなに時間のかかる事をするよりも、直接入った方が短時間で助けられるはずなのに。

あたしの命を心配して…？

ホンマにそれだけの理由…？

《お姉ちゃん…早く僕を見つけて。苦しいよ…》

リュウの声が聞こえた。

心なしかさつきよりも力がない。

でも、きっと近くにいる。

《リュウ、大声出せる？》

《のどが痛くて、声出せない》

《じゃあ、おっきな声じゃなくてもいいから。なんとか出せへん？》

「…ちゃ…ん…」

聞こえた。

間違いない。

近くにいる。

《ようがんばったな。リュウの声、聞こえたから。すぐ行く》

これだけ頭の中で会話をしたんやから、きっとリュウの体力もだいぶ消耗してるはずや。

早く行かな。

早く…

早く…

着ている服はどこも焦げてないし、体中のどこにも煤はついてない。

でも、火の熱はそのまま感じるし、息も苦しいし、のどの痛い。

リュウと会話をしすぎたせいで、頭もいつそ割れた方が楽になるんじゃないかと思うくらい痛かった。

正直言つて、もう倒れてしまいたかった。

でも、死なせるわけにはいかへん。

リュウも、ヒメコも…

フラフラのまま進んで行くと、周りよりも火の量が多い場所についてた。

ここにいる。

確実に。

そこにあつたはずのドアは、焼け落ちてすでになかった。

今もまだそこにある蝶番は、金属で出来ているせいか真っ赤に染まっている。

サーカスでライオンが通り抜ける火の輪のようになってる入り口を入り、必死で目をこらした。

入り口の火の量のわりには中に赤い色はなかった。

その代わり、煙で真っ黒になっていて、やっぱり前は全く見えへん。

「どつしよつ…どつにいるかわからへん…」

手探りで探してみたけど、あたしの手は空をかくしかなかった。

「落ち着け」

エンマの声。

その声を聞いただけで、あたしは一瞬にして落ち着きを取り戻した。

「目でみようとすれば余計に見えなくなる。見るんじゃない、体で感じる」

体で感じる…

あたしは目を閉じた。

目の裏側まで真っ赤。

リュウ…

ヒメコ…

2人の顔を頭に思い描いた瞬間。

見えた。

いや、感じた。

あたしはその場所へと急いだ。

そこには息を荒くしたリュウと、ほぼ無呼吸状態のヒメコが倒れていた。

それともう一人。

火から二人を守るように覆い被さってる人物。

「ルイちゃん」

「ばあちゃん…なんで？」

村瀬のばあちゃんやった。

この人が何でここにいるんかとかは後でいい。

とにかく三人を運び出さな。

意識のあるリュウとはあちゃんよりも、ヒメコが心配やった。

あたしは、瀕死のヒメコを抱き上げようとして初めて気づいた。

エンマがとにかく火を消せって言うてた理由に。

あたしが中に入ったところで誰一人助けられへんと思ったからやろう。

だってあたしは誰にも触れへんねんから。

ちっちゃい体のリュウすらも抱き上げる事は出来ひん。

あたしに出来るのは火を消す事だけ。

エンマはそう思ってるんや。

「エンマ！天城ルイをナメんな！！」

あたしは閻魔様に向かって中指を突き立てた。

あゝあ。

地獄に墜とされるかもな。

3人の人間を宙に浮かせ、あたしはさつき来た所を戻り始めた。

リュウとばあちゃんは驚いている。

《お姉ちゃん、コンビニにいた人だよね？魔法が使えるの？》

リュウにはあたしが見えてたんか。

確認のため、ばあちゃんの方を見てみた。

「この子にもあたしと同じ力があるんだよ。」

ただ、まだ幽霊と生きてる人間の区別がつかないみたいなんだ。

でも、この火事を知らせてくれたのはこの子だ。

だからすぐに助けにきたのはよかったんじゃが、火のまわりが早くて出れなくなっちまって……」

なるほど。

あたしは深く頷いた。

《あたしは幽霊やねん。だからこんな事出来るねんで》

《へえ、すごいね》

《まあな》

リュウはやっぱ声がでーへんみたいで、こんなに近くにいるのに頭の中で会話をせんとアカンかった。

外に出るのはすぐやった。

入った時とは違って、感じながら前に進んだから。

前が見えへんくても、見る必要なんかない。

外に出てみると、消防車と救急車と野次馬がいた。

野次馬たちは、消防士がいくら防水しても消えへん業火の中からフワフワと浮いて出てきた3人を不思議そうに見ていた。

「ごめん、落とすで」

一応断った上で、3人を地面に落とした。

ばあちゃんは背中を軽く打ったみたいで、ちっさいうめき声をあげた。

ごめん、大目に見て。

「ルイ!!」

すぐにカズサが駆け寄ってきた。

「何で1人で入るの?!死んだらどうすんのよ!」

カズサがこんなに怒ってんのを初めてみた。

「あたしは、絶対死なへん」

焼けるように痛いのだのせいで、自分の声が若干変わっていた。

「無事でよかった…」

カズサがあたしに抱きついた。

人に触れる事がこんなに幸せなんやって改めて感動した。

「カズサ、ごめん。まだやる事があんな」

ホンマはもうちょっとカズサに抱きつかれていたかったけど、その気持ちを押し殺し、カズサの体を自分の体から離れた。

「やる事って…?」

「まあ、いいから見てて」

カズサは半泣きで訴えてきた。

やらなくていい――

「お前、火消すつもりじゃねえだろうな！」

さっきのリユウとの会話だけでも相当な体力使ってるはずだ！

それに、3人の人間を一遍に動かしてるんだぞ！

その上この化け物みたいな火を消すなんて、お前死ぬ気か！

中にはもう誰もいねんだから消す意味なんてないんだぞ！」

エンマが怒鳴った。

声が割れてる。

「意味はある。あんたがやれってゆうた事やる。最後までちゃんとやるから」

今までにやったことのないことをやってみるつもりやった。

自分の力を信じる。

あたしになら出来る。

あたしにしか出来ひん。

「来い…来い…」

風を動かせるなら出来るはず。

「動け…動け…」

神様。

めんどくさがらずにあたしに力をください。

早く…

早く…

もう…

意識がもたへん…

倒れそう…

そう思った瞬間、あたしの願いは叶った。

神様、ありがとう。

飛べへんかった事は忘れるわ。

あたしは…

雲と大気を動かして雨を降らせた。

化け物みたいな火に負けんくらいの化け物みたいな雨を。

これで火は消える。

「ルイーー!!」

カズサの叫び声が聞こえた。

近くにいるみたいやけど、遠いところから聞こえる。

あたしの名前をよく叫ぶやつやなあ。

地面がほつぺたにくつついてる。

あたしは、倒れたんか…

なんか…

眠い…

電車に飛び込んだ時の事を思い出す。

あの時もこんな風に眠たくなつたなあ…

あれ？

幽霊は眠たくならんはずなのに。

おかしいなあ。

急に、あたしの体がフワリと浮いた。

「お疲れさん」

耳元でエンマの声が聞こえた。

あたしはエンマに抱きかかえられてるみたい。

お姫様抱っこ。

「なんで…あんたが…」

エンマは優しく微笑んだ。

「お前を迎えにきた」

「迎え…？」

エンマはうなずき、なぜか号泣しているカズサを見た。

「カズサ、コイツを手伝ってくれてありがとな」

カズサは首をブンブンと横に振った。

首、取れるて。

「じゃあ、コイツ連れてくから」

エンマはあたしを抱きかかえまゝ、その場を立ち去ろうとくるりと

方向を変えた。

「待つて」

カズサがそう言ってエンマの前に回り込んだ。

「ルイ、ありがとう。あたし、ルイの事大好きだから……」

礼を言いたいののはあたしの方やのに、のどが張り付いていて声を出せへん。

仕方なくうなずいた。

ちよつとでも動くと体中に激痛が走る。

カズサの涙目の笑顔を見た瞬間、あたしは気を失った。

ゆびきりげんまん

目が覚めると、体中の痛みは全くなっていた。

頭ものども痛くない。

疲労感もない。

辺りを見回してみた。

どう見てもここはグレイブではない。

だって、すぐ近くにエンマがいるから。

ここは、エンマと初めて会った場所や。

「目、覚めたのか」

エンマの声を聞くと安心する。

あたしはすっかりとうなずいた。

「よかった。5日も眠ってたから、ちょっと心配になってきてたところだ」

「5日…」

「その5日の間に何があつたか教えてやる」

あたしは、特に返事をする必要もなく続きを待った。

「まず、あの後火は消えた。お前のおかげで全焼は免れたみたいだ」

そっか…

よかった…

「ただ」

ただ…

いい話の時よりも悪い話の時に使われる方が圧倒的に多い言葉。

「ヒメコがここに来た」

「どついう事…?」

「言わなくてもわかるよな」

ヒメコが死んだ…

あたしがみつけた時にはもうほとんど息をしてなかったヒメコ。

あたしが…

もうちょっと早く見つけてあげられてれば…

「お前のせいじゃない」

そう言われても…

やっぱりそう思ってしまう…

「お前に感謝してたぞ。

助けにきてくれてありがとうって。

本当は直接言いたかったみたいだが、まだお前が寝てたから、俺が伝えておくって言うておいた」

ありがとう…？

助けてあげられへんかったのに……

あたしが死なせたようなもんやのに…

「お前が自分を責めると、ヒメコは浮かばれないんじゃないか？」

自分を責める事が許されへんのやったらせめて…

「リョウジの目を覚まさせてあげる事は出来ひんの？このままやつたらリョウがかわいそうや」

エンマは尖った牙を剥き出しにして笑った。

「それならもうヒメコがやっていった。

リョウジが目を覚まさなかったのは、事故った時にその衝撃で魂が体から離れちまってたからだっただ。

帰り方がわからなくてずっとさまよってたんだと。

で、ヒメコがここに来る前にリョウジの魂を探し出して、体にぶち込んできたらしい」

さすが。

「じゃあ、カズサは？」

「成仏したよ」

「でも…リョウジとリョウジの家族が幸せになるまでは下にいるって…」

「ヒメコは死んだが、お前に感謝しながら清い心で上に行った。

もう悪いものは何も持っていない。

残されたリユウにはリョウジがいる。

リョウジにもリユウがいる。

それに、あのばあさんもな。

一体誰が不幸だっていうんだ？」

そっか…

そんな幸せもあるのかな。

カズサ、あんたも負けんと幸せになるんやで。

「お前の下界での仕事はこれで終わりだ」

「え…？」

「死を覚悟で人を助けようとする事が、仕事人卒業の条件だったんだ」

じゃあ…

あたしは天国に行けるん…？

―ずっとみんなを見てるから―

これでシュウイチとの約束を守れる。

「じゃあ、グレイブっていうのはホンマはないの？ただの脅し文句
やっただけの事？」

「いや、ある。」

でもグレイブに送られるのは、仕事人になっても全く心を入れ替えないやつが二度目の死を迎えた時だけだ。

命懸けの仕事をして死んでも、グレイブには送られない。

グレイブの存在を知っていながらも命を張れる仕事人だけが、天国に行ける」

そうやったんや。

そついう事は最初に言っておいてほしかったけど、それを言ったら意味ないんじゃないな。

「じゃあ…、あたしは…もう天国に行けるんじゃない…」

「いや」

「は？」

せつかく満ち足りた気持ちになつてたのに、台無しや。

まだなんかあんのか。

次はなんや。

「下界での仕事を終えた仕事人には、これから10年間閻魔業をや
ってもらわないといけない」

「あんたみたいになれと？」

「正解」

最悪や。

こんな陰気な場所で10年も。

発狂したらどうしよう。

…ん？

って事はコイツも？

「あんたも前は仕事人やったって事？」

「大正解」

へえ。

コイツも人の為に命張ったって事か…

見えねえ〜！！

そんな素晴らしいヤツには間違っても見えへんわ。

見た目100%チャライし。

ああ。

あたしも人の事言えんか。

あたしが半笑いでエンマの仕事人時代を想像していると、エンマの表情が激変した。

こっちまで胸が締め付けられるような悲しい表情…

これは…

何…？

「ルイ…本当に俺が誰かわかんねえか…？」

この人は…

何を言ってるん？

だってあんたは…

「エンマ…」

あたしがそう言うと、エンマはそれまで座っていたソファから立ち上がり、あたしの目の前に立った。

そして、思い切りあたしを抱き締めた。

意味が…

わからへん…

「思い出せ…頼むから…」

エンマはあたしを抱き締めている腕に力を入れた。

なあ、エンマ。

あたし、わかったかもしれん。

あんたが誰か。

この温もりは、あたしが一度も触れた事のないもの。

でも、何度も感じていたもの。

「リュウ…」

エンマはあたしの体を離し、あたしの目をその真っ赤な瞳で見つめた。

その瞳を見て確信した。

この人はリュウ。

あたしを置いていったリュウ。

「リュウ…なんで…あたしを置いていったん…？なんで…連れていってくれへんかったん…？」

ホンマはわかってた。

リュウが閻魔なら…

リュウがあたしを置いていった理由も。

あたしに触れへんかった理由も。

あたしがリュウのほとんどを知らなかった理由も。

「お前と出逢った時、俺はもう死んでいた。

今のお前と同じ仕事人だったんだ。

勝手に消えたのは申し訳なかったと思ってる。

でも俺はお前を置いていったんじゃない。

連れていけなかったんだ……」

リュウが突然消えたんは、仕事人を終えて閻魔になったから。

リュウがあたしに触れへんかったんは、触れたくても触れられへんかったから。

あたしがリュウのほとんどを知らんかったんは、自分でいつか消えてしまう存在やって事をわかってて、その時になってあたしの中に自分を残さへん為。

「あたしには靈感なんてなかったのに……。なんでリュウの事はちゃんと見えてたんやろう……」

「自覚していないだけで、お前にはものすごい靈感があるんだよ。

それがあまりにも強すぎてコントロールしきれてないんだ。

だから、生きてる人間と幽霊の区別がつかない。

はつきり見えすぎるから。

お前のポルターガイスト能力は、生前の靈感が変化したものなんじやねえかと思う。

まあ、本当に神様がテキトーに与えただけなのかもしれないけどな」

そう言えば、銀行の前にヒメコが立っていた時もカズサを最初に見た時も普通の人間やと思ってた…

あれも、自分の靈感をコントロール出来てへんかったからなんか…

「でも…なんでそんな…」

「見た目が違うのか、だろ？」

あたしはうなずいた。

角と牙が生えたからとか、髪や瞳が赤いからとかそういう次元の話ではない。

顔も声も、全てがあたしの記憶してるリュウとは違う。

全くの別人。

「仕事人から閻魔になるときに、容姿を変えられる」

「何の為に…？」

「ここに来た奴に、俺が俺だと悟られない為に。」

生前や仕事人時代に関わった人間が死ねば、必ず俺の元にくる。

だからお前もここに来たんだ。

でも、閻魔は誰が来ても公平に裁かないといけない。

少しでも甘い審判を下せば、閻魔ではなく審判にかけられた方がグレイプに送られるんだ…

どんなに親しかった奴が来ても、そいつを地獄行きや仕事人にしないといけない時もある。

どんなにヒドい審判でも、それを下したやつが俺だとわかるよりも、全くの他人の方が死者にとってはまだ救いになる。

死者への配慮の為に容姿を変えられるという訳だ。

残酷なほど公平な審判を下すことが、天国に行くための第2の試練なんだ」

リュウはそこで話を中断した。

たぶん、あたしに考える時間を与えてくれている。

リュウの話はあたしにはちょっと難しいけど、なんとか理解する事が出来た。

たつぷりと時間を置いてから、リュウはまた話し始めた。

「でも、容姿を変えられるのは死者への配慮という理由からだけじゃない」

これから聞く話の方が重要らしい。

リュウの表情でわかった。

「どれだけ親しかった奴が来ても、どれだけ愛した人が来ても、閻魔は自分の正体をバラしてはいけないんだ。

自分から名乗ってはいけない。

でも、相手も気付かない。

それが、過去に罪を犯した閻魔への罰だ」

名乗りたくても名乗れへん…

気づいてほしくても気づいてもらえへん…

それがどれだけ辛い事が、今のリュウの表情と声で痛いほどわかった。

「もし…その決まりを破ったら…？」

リュウは…

これからどうなんの…？

あたしの為に、上での掟を破ったリュウはどうなの…？

リュウはあたしの目をしっかりと見て笑った。

「閻魔を降ろされる。もう一度仕事人からやり直した」

グレイブに送られるわけではないんや。

でも…

リュウの笑顔が気になる。

「ホンマにそれだけ…？」

リュウはあたしをもう一度強く抱き締めた。

そして、耳元でこう言った。

声が…

震えてる…

「そこでもう一度死ねば、もう閻魔にはなれない。もちろん、天国にも行けない」

ハッキリと言わんかったけど、あたしにはわかった。

もう一度死ねば、グレイプに送られるという事を。

「仕事人からやり直して事は…また命張らなアカンのちゃうの？
！」

グレイブへ送られるとわかっていながら、命を張らなアカン…

そんなん、ヒドすぎる…

「二度目の仕事人は、一度目の時の記憶と閻魔の時の記憶を消される。

だから、グレイブへの恐怖なしでまた人助けが出来るんだ」

あたしの記憶も消される…？

でも…

「じゃあ…なんであたしに正体バラしたりしたんよ！そんなことしいひんかったら何年後かには天国に行けたのに！」

「お前に気づいてもらえない事が何よりも辛かった…

グレイブよりも、お前が俺を忘れることの方が怖かった…

それに、お前に謝りたかったんだ。

勝手に消えたこと…

そのせいでお前を死なせちゃったから…」

涙が出た。

本当の死を知ってたのにあたしのために掟を破ったリュウの気持ち
が、あたしの全部を支配した。

あたしは、この人が好き。

全身が破裂してしまいそうなくらいに、この人が好き。

「アホやなあ……」

あたしはリュウの赤い髪を撫でた。

「そうだな……」

「もし死んだら、次は絶対許さへんから」

「俺は死なねえよ。」

それに、お前を絶対に忘れない。

お前は俺に気付いてくれたから……。

だから俺も絶対に忘れない。

上で待っててくれよな。

今度は俺がお前を追いかけるから」

「約束」

そう言ってあたしは、右手の小指を突き出した。

リュウも自分の小指を絡めてくれた。

ゆびきりげんまん

うそついたら

はりせんぼんのます

そこまで歌ったところで、リュウは消えた。

せめて指切りくらい最後までさせてよ。

やっぱり神様はめんどくさがりやで、いじわるなんや。

完結

「アホやなあ……」

あたしはリュウの赤い髪を撫でた。

「そうだな……」

「もし死んだら、次は絶対許さへんから」

「俺は死なねえよ。」

それに、お前を絶対に忘れない。

お前は俺に気付いてくれたから…。

だから俺も絶対に忘れない。

上で待っていてくれよな。

今度は俺がお前を追いかけるから」

「約束」

そう言ってあたしは、右手の小指を突き出した。

リュウも自分の小指を絡めてくれた。

ゆびきりげんまん

うそついたら

はりせんぼんのます

そこまで歌ったところで、リュウは消えた。

せめて指切りくらい最後までさせてよ。

やっぱり神様はめんどくさがりやで、いじわるなんや。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9119q/>

BLACK × HEAVEN

2011年3月20日07時16分発行